

糸球譜

外山  
刀文

ル  
4857



門 九 〇  
號 4857  
卷



37-26127



球球談序  
球球在薩之南部海中蓋  
一小島也慶長中臣附于  
薩然在其上世源鎮西宗  
垂因統即其為屬于我也  
亦已尚之大島象主人嘗着

萬國新話亞細亞一部業已  
梓行琉球後亦收其中而以韓  
琉蝦久屬

本朝世亦粗諳其國事故  
臨梓除之日者書賈重請  
其初稿以梓之需予之予之然

國業大俸民事細碩詳志  
書中予更何言即書此言  
以序實政庚戌秋九月

蘭溪前野達







神代紀（イザナノミコノミヤ）小海宮（イザナノミコノミヤ）と云ふは此玉なる御事。予の撰  
 する万象雜組の中地之部は條ふ所を載す。  
 け國の下郷（イザナノミコノミヤ）あり。土人（イザナノミコノミヤ）どもは琉球と云ふを屋（イザナノミコノミヤ）其意  
 とす。蓋ての玉は旧名なり。中山傳信録（イザナノミコノミヤ）小見と云  
 う。其地は薩州の南百四十里あり。南北長サ六十  
 里。東西十四五里あり。昔は國を二つに分り。  
 所謂中山山南山北あり。然るに大琉球中山南十二  
 世尚巴志と云ふ國王山南山北を併せしむ。中山  
 一統（イザナノミコノミヤ）は成ぬ。此玉に屬する島三十六あり。地圖と  
 三國通覽（イザナノミコノミヤ）等説其他諸書小載す。其畧（イザナノミコノミヤ）きぬ。

○開闢の始（イザナノミコノミヤ）附 鎮西八郎鬼の寫（渡り記）

中山世鑑（イザナノミコノミヤ）と云。琉球の始祖を天孫氏（イザナノミコノミヤ）と云ふ。其はじめ  
 一男一女自然（イザナノミコノミヤ）生れ出づ。夫婦（イザナノミコノミヤ）あり。是は阿摩美  
 久（イザナノミコノミヤ）と云ふ。中良（イザナノミコノミヤ）天孫（イザナノミコノミヤ）と云ふ。長田（イザナノミコノミヤ）の  
 天孫氏（イザナノミコノミヤ）と云ふ。國王のけり。之あり。二男ハ諸度の始と  
 あり。三男ハ百姓は始とあり。長女を君と云ふ。二女は祝と  
 云ふ。國の守護神（イザナノミコノミヤ）と云ふ。一人ハ天神とあり。一人ハ  
 海神（イザナノミコノミヤ）とあり。天孫氏（イザナノミコノミヤ）の末裔（イザナノミコノミヤ）二十五代。世を傳へし。  
 其を一万七千八百二年にして断絶（イザナノミコノミヤ）と云ふ。史（イザナノミコノミヤ）と云  
 鎮西八郎為朝の子。舜天（イザナノミコノミヤ）と云ふ者。國王とあり。舜天（イザナノミコノミヤ）の  
 子舜馬（イザナノミコノミヤ）

其子義成よりて天孫氏の末裔小位を讓る世俗今の琉球王は其子の血統なりと云 中良案る小中山傳信録に

舜天八日小人皇の後裔大里大里按司ハ其子の男子なり按司朝公の男子ふと

祀せり。大里と地名。按司官名。大里按司ハ其子の男子なり。と云くハ、其子と云ふハ、

其子と云ふハ、其子と云ふハ、朝公ハ為朝の為成督きて録し

あはし。白石先生の琉球事畧に。二條院永萬年

中。乃新海小浮び。流小從ひく。而紙未免。琉球王ふ至り。

流小求るの義に於て。流求と改稱せり。と云ふハ流求と云ふハ、是より先此名あり。國人其武勇に畏れ服も。

その名を流求と名付。遂小大里按司の妹小お具し

て舜天王を産。為朝此女に止まらり。日久しく。故土代

る事林等。終く志く。遂小具に帰せり。と云く和漢

三才圖會に。乃新遊して後。初をまき。神号紙舜天

大神宮といふと紀より誤なり。因小紀を為朝六歲

の時。父三條判官が義と同一く。新院の御味方也

かり。軍破て伊豆國に流る。二十九歳ありて鬼寫

一後り。歸玉の後。國人等が訴小依く。官兵をさし。向

られ。三十三歳ありて自殺あり。保元平治物語小

見えたり。白石先生。乃新あり。鬼寫といふもの。別

今の琉球。其是なり。と云れ。何小なり。つうねと云

所見たり。愚案る。此代の古名を。屋其惹寫也

いふ。或ハ文字を誤り。惡鬼納寫とも云に。後。附會

志る説ありん。

○日本一付来の始

琉球事畧也。後花園院。宝徳三年七月。琉球人  
 来りて。義政將軍に淺干貫とそのもの方物を献じ。是を  
 一と其玉人。兵庫の浦ふ来りて交易はと云案  
 に十五代尚金福と云玉王。位小立し時あり。是を  
 代はよ八代後花園。後土御門。年切なきまの八百二十二年を懸く。  
 正親町院。元龜十一年。琉球人来りて産物を献じ。  
 薩摩國と隣ふを遣ひ。深く好を通じ。後和と名  
 けり。年毎小方物を賜りしが。慶長年中。彼玉の三度

邪那といふ者。大明と議く國王をそく。其日か一の付  
 来をとりり。薩州の太守。島津陸奥守家久。使  
 をせりて故を以て。邪那使小對して。移くの趣  
 礼を振おこり。我久大不懐り。同十三年。駿府小越き。  
 神君不見え。其後をりて。殊伐と云。以るを。其  
 神。我久が所存小。其後由拘令あり。其れが聖子  
 二月。兵船救百艘を以て。攻付志む。諸土切を抽て  
 攻へく。同年四月。首里小丸入し。玉王尚寧を擄さらし  
 て。凱陳くわいも。尚寧王。日本に居事三年。過を悔罪を謝し。  
 其く。其玉。不帰る事。を好よしたり。  
明。慶長十一年 其時 神君



我久不琉球國を属しくみらるより。永代附庸の國  
 とあり。臣と一侍するより。臣教をりまをして。  
 將軍家御代移りぬ。中山王より慶賀の使臣を来聘  
 せしめ。彼王の代移りぬ。將軍家御代命と。後お  
 度より侍を遣せられぬ。之うして後位以嗣。他日恩謝  
 の使をもちりぬ。其國唐と日本のる不有。嗣封  
 乃時ハ清よりも冊封を文よりぬ。去ども。年ハ古とく  
 日本ハ古とくぬ。日本の扶助おわされぬ。常任の日用  
 をも。亦びるより。あつと。去りて。玉人耶麻刀を  
 称し。甚日本に以る。とむとぬ。

○官位兼冠服圖説

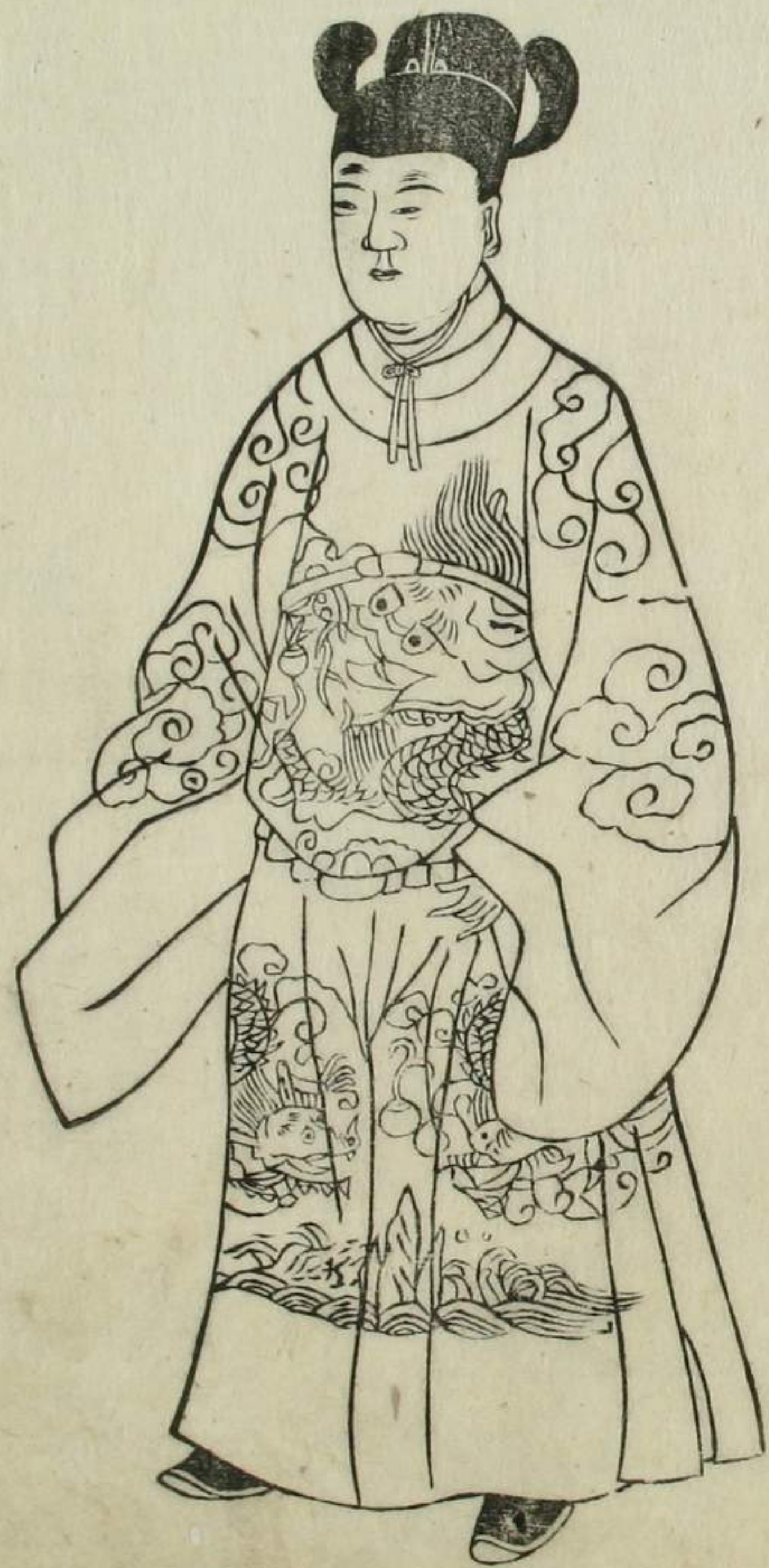
位ハ一品より九品まであり。勿論正從の別あり。王の子を  
 王子と稱す。正一品 領土を按司と稱す。後一品○古ハ按司  
 地を治めし。各權威を領す。依り。第十七代の玉尚眞。制を設。首里の城  
 下。小居住せし。察事紀官より。友人を一人けり。其内。其を  
 支死せし。歳の終。小物威を。按司のより。納めしむ。天曹司。地曹司。人曹司とて。國家の  
 政。司。代。司。日。大。臣。を。三。司。官。親。方。と。稱。す。正。一。品。吏。を。以。下  
 の。大。臣。を。親。方。と。稱。す。後。二。品。親。雲。上。と。稱。す。その。ハ。武。臣  
 たり。三。品。より。七。品。里。之。子。と。稱。す。ハ。扈。從。の。少。童。なり。ハ。八。品  
 筑。登。之。と。稱。す。ハ。九。品。なり。

○國王ハ圖のめく烏紗帽。小朱。以。櫻。龍。頭。の。簪。雲。龍。の。紋。

あり袍を着し。犀角白玉の帯を用ひ。何處も明朝乃  
 制なり。今清朝の丹封を文たぐり。冠服ハ古を改  
 めど。一品以下帽ハ等。簪四等。帶四等あり。其荒瑣ハ  
 一品と金の簪。彩織緞の帽。錦の帶。緑足の袍を着せ  
江戸(未聘)より倭兵ハ一品あり。  
玉王の名代ハ玉の衣冠を着用せ。 二品ハ金の簪。從二品ハ。冠を金よりく  
此後ハ未聘より倭兵ハ一品あり。  
此後ハ未聘より倭兵ハ一品あり。  
 袍を着せ。三品ハ。銀の簪。其より綾の帽。帶。袍も小  
 二品に同じ。四品ハ。純蟠の紋を織り。紅地帯。簪  
 帽。袍。三品も同じ。五品ハ。雜色花帶。其外ハ。赤糸。同  
 六品七品ハ。黄より。紡の帽。簪と袍も。三品も同じ。帯

ハ五品と同じ。ハ。赤九品ハ。大紅縞紗の帽。其他ハ。赤  
 糸。同。雜職ハ。紅絹の帽。其外ハ。赤糸。同。同の簪。  
わろし 紅布此帽。或ハ。緑布の帽を着る。八里。長保。長。か。と  
わろし かり。青布の帽。其外ハ。百姓。頭目。かり。凡。く。友。後。ハ。  
 平服より丈長く。上より。帯。め。く。心。ひ。り。な。り。い。く。め。と  
ちり 寛。や。り。ふ。着。ね。紙。夾。烟。袋。か。と。懐。ふ。今。事。日。本  
 の。め。し。童。子。は。衣。後。ハ。三。寸。分。り。の。招。明。あり。え。後  
 乃。時。縫。詰。り。え。後。の。り。ハ。下。お。裁。り。女。人。の。服。も。さ  
 して。整。り。の。り。外。衣。を。襪。は。し。左。右。の。手。か。て。襟。を。曳  
く。り。と。わ。り。 衣。後。の。制。日。本。と。同。一。衣。より。ふ。衣。後。ハ

琉球國王



さとの  
里之子  
扈從の神

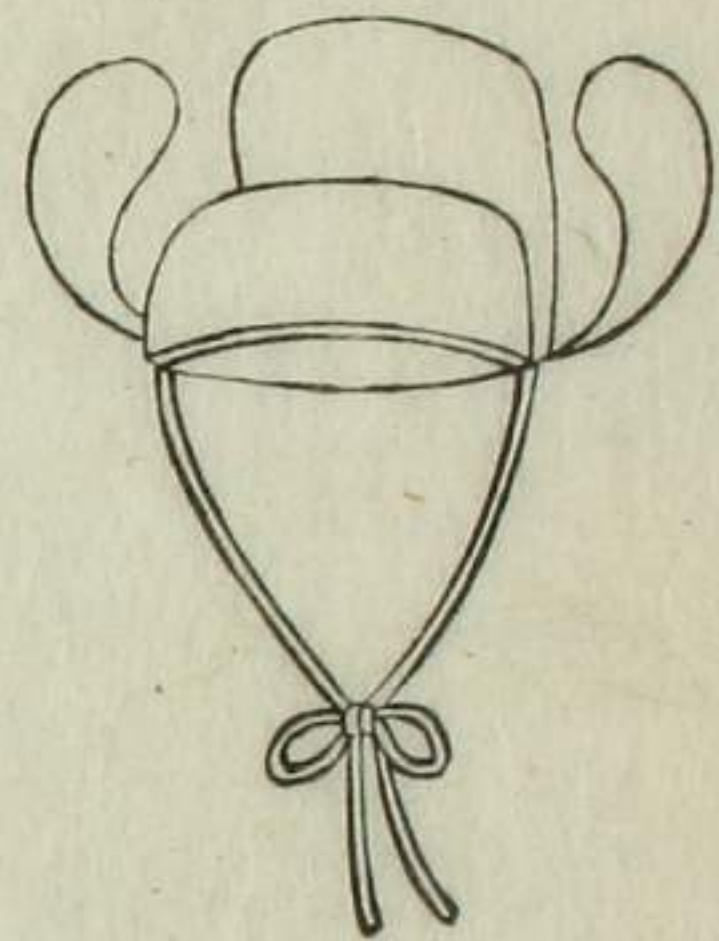


琉球記

琉球

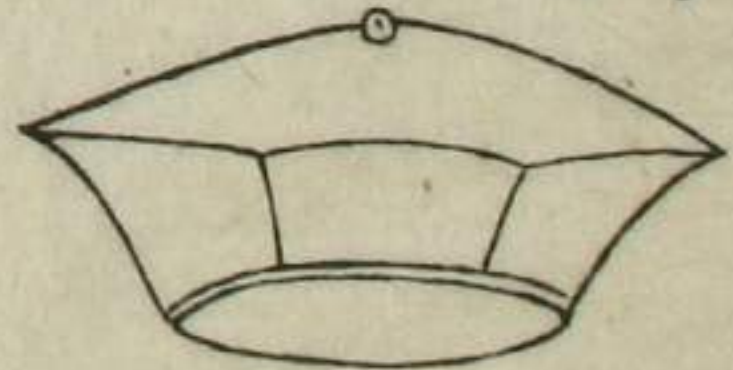
王帽

玉冠飾  
みくぼ  
玉王  
こねを  
載く



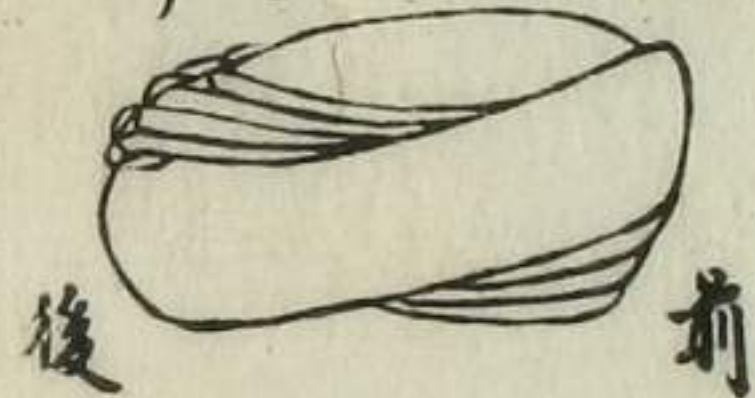
元帽

黒き詰りくぼ  
六の角あり医官  
樂人茶道り介  
判筆云々  
あねを用也



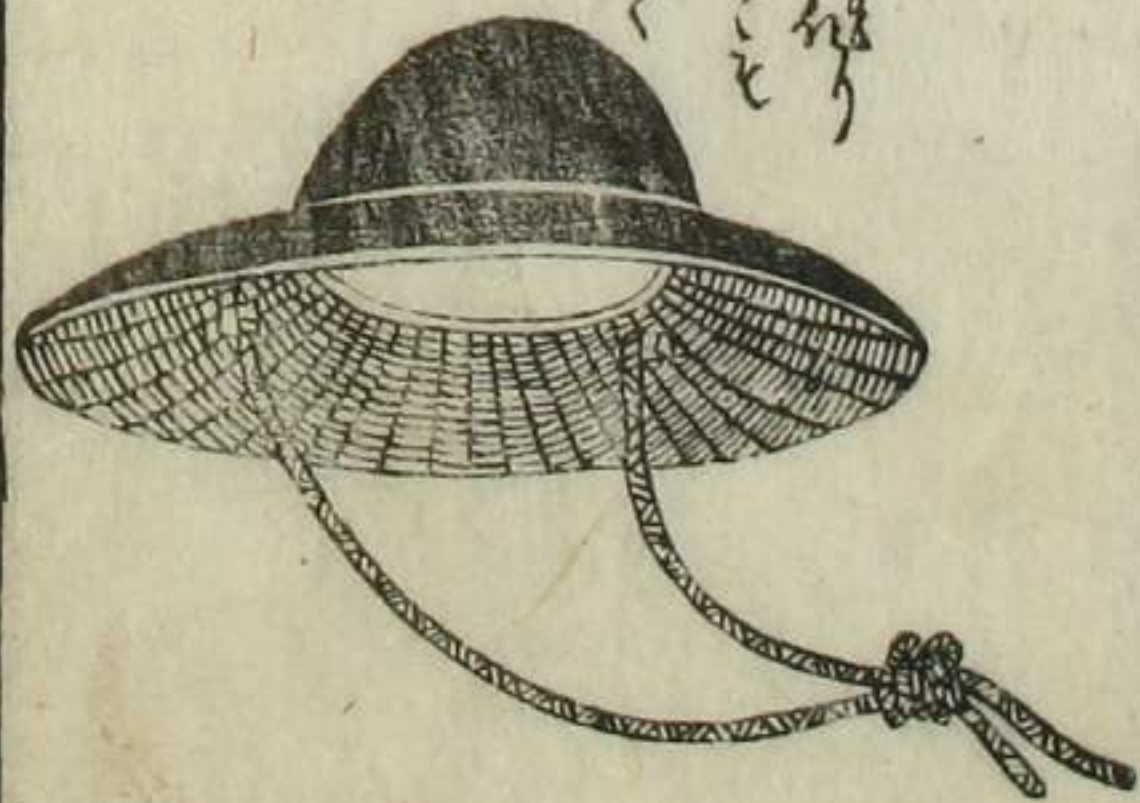
官民帽

一田より九品までの  
制皆同一くあ紙  
を骨すくちくぼ  
前ふ七畝は後す  
十二の畝はわくぼ  
ゆくすすをを  
よふ記さるや



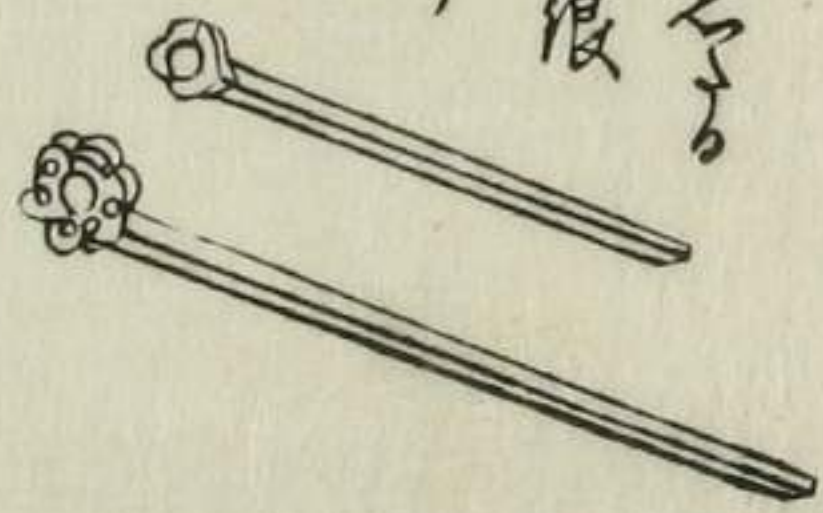
笠

菱葉くぼ  
まじ草すく  
ゆりやを  
内紙す  
膝あ  
塗あり



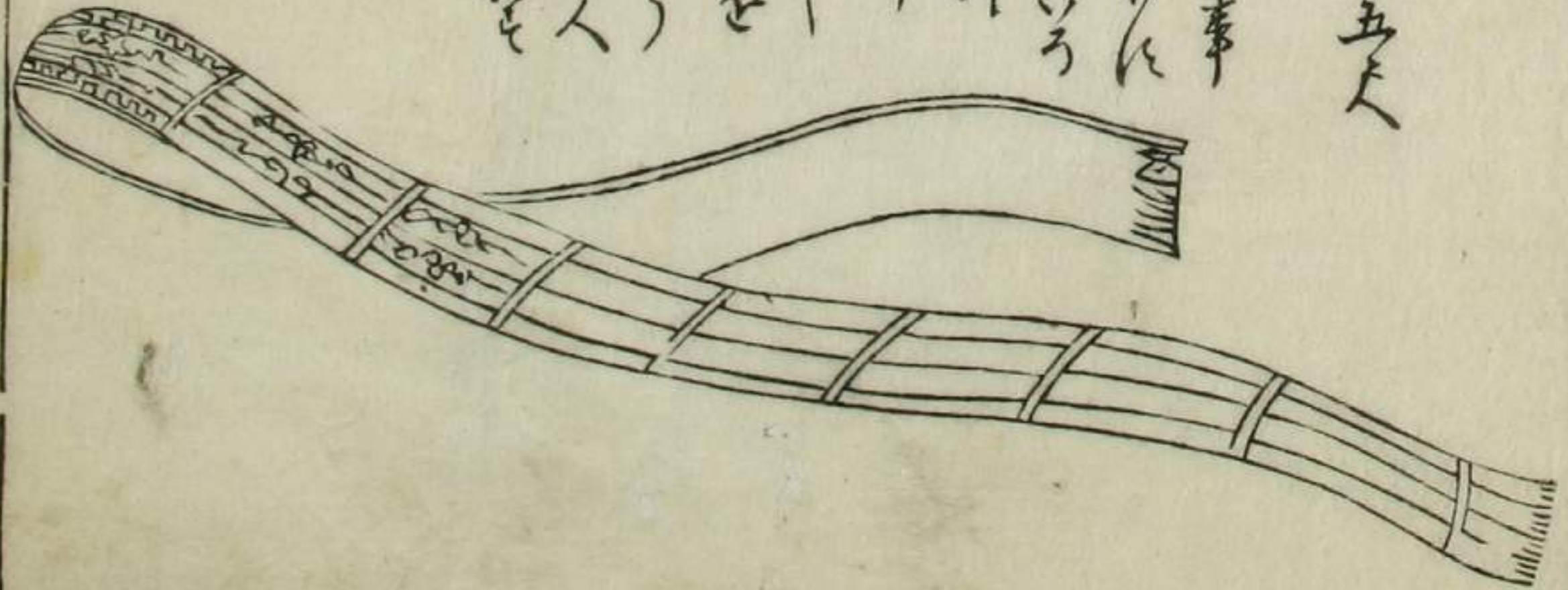
短簪

長サ三四寸元後志  
者あね以月白金銀  
洞あり地より  
ふハし



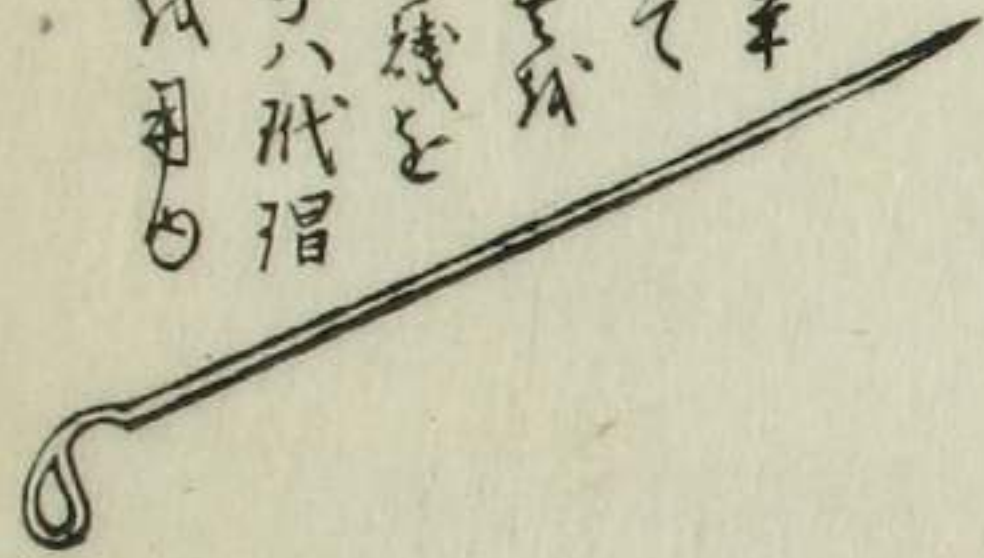
帯

長サを丈四五尺  
寬サ六七寸  
腰をまじり  
三重四重より  
は帯地の地いろ  
地紋より別  
あきり  
裁り  
此帯の裁を  
落摩か  
とく好むの  
まじり



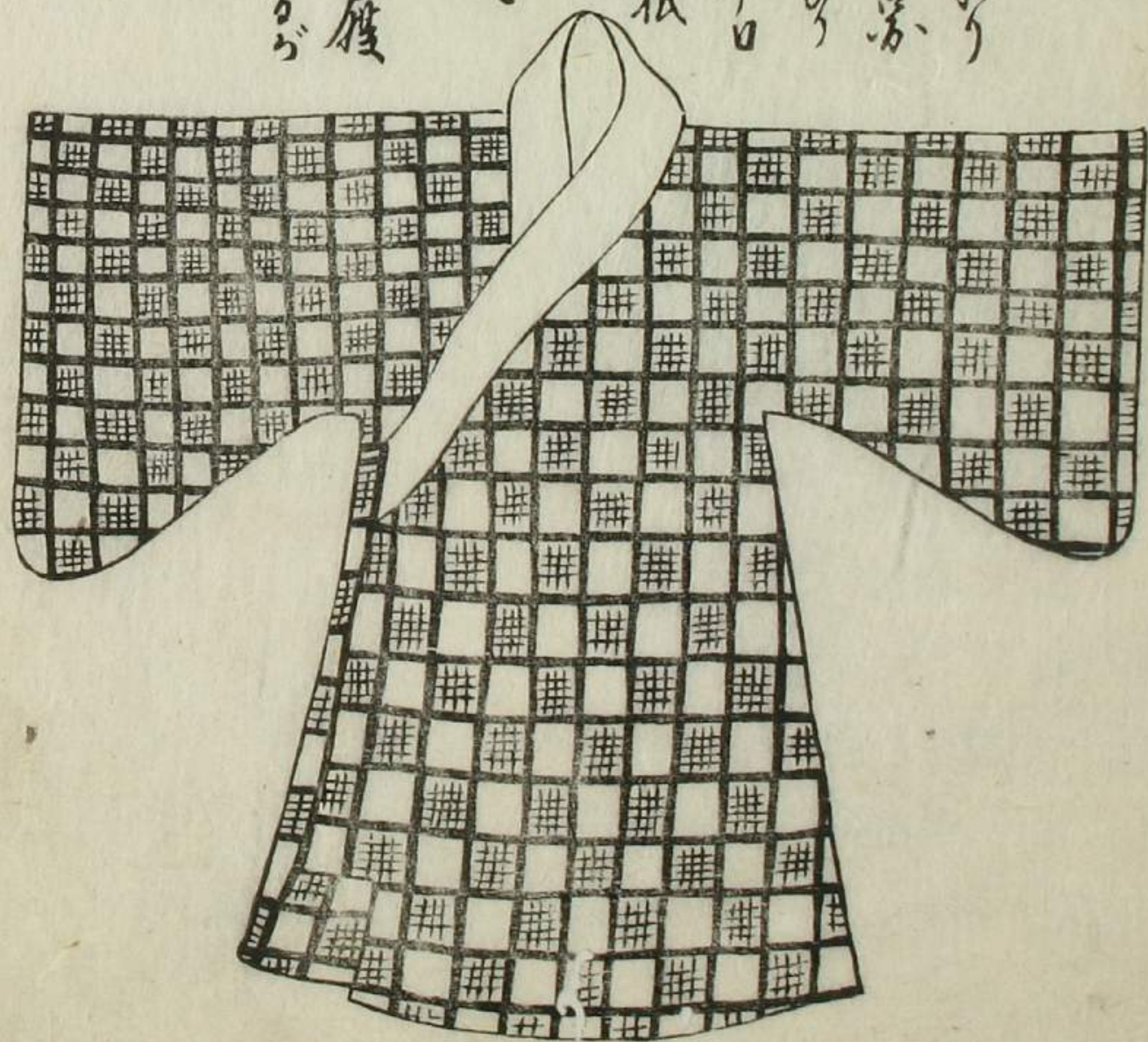
長簪

長サ尺余婦人か  
の男子元後志  
髻の丈より  
月白金銀  
分り氏家の女子ハ  
おく制し



衣

袖大サ二三尺をかり  
 長サ多ふるを家  
 事の物ハ年故かり  
 左後ハ丈長し平日  
 着るもの物ハ大抵  
 芭蕉布の織  
 織を多用せり  
 此ハ足袋穿履  
 日ナと同カ  
 由急小圖セ



両面とも反履して着るもの物ハ新しきもの有る也  
 又、博常の織物ハ唐土間より内地より織けしもの  
 漢元流球國よりハ芭蕉布の織物ハ、家々  
 の女子、皆これ織物也。昔里より新しき物と云ふ  
 こと也。

○年中行更

正月元旦國王冠服を改て、先年徳を辨し、衣を  
 諸侯の礼成文、同十五日の式元日、同日ト、  
 玉より葉と酒、酒場ハ、海民衆の女子ハ、纏とほき  
 提び、生る板、板、いふ、殿と存る、果のか、あ、中、木

両面を反覆して名をなす物不制して有り。惣して  
 帽帯の織物ハ唐土閩州の地あり織けし賣  
 後琉球國よりハ芭蕉布の織物。家々  
 の女子皆手織し。首里より制する物を上品  
 とす。

○年中行吏

正月元旦國王冠服を設て先年徳を拜し。是を  
 諸臣の礼成文。同十五日の式元旦不同ト。  
 王より茶と酒と紙場ふ。百姓民長の女子ハ繡を  
 縫ひ。また板築の戲をなす。宮の如く。中へ未

毎月十五日法臣の宴あり。



板舞之圖



の臺たいに居ゐ其上へ板い板た板た板た。二人の女子ににのむすめ兩端りょうたんより對むかひ  
 て立た。一人ひとり踏ふき上あれば一人ひとりハ下くだハわり。踏ふき上ある女子むすめ。  
 左ひだりの板いに居ゐる女子むすめ。あかあまままま女子むすめ。ああまま天  
 之あま削く上ある。其その新あらた例たとも。其その地ち北きた極ごく地  
 を出いる。二十にじゅう六ろく段だんの板い。暖ぬる氣きも格かく別べつめく。板いの  
 長ながも短みじかひ。長なが春はるハ四季しきとも。に花はな受うけも。月つき以もて  
 盛さかると。羊ひつぎ躑つとむ躑つとむハ詩うた文ぶ又また事ことなり。元もと日ひ王わう宮みやのこ花はな籠かご  
 小こ押おし子こ。恒とこ例たとありし。薩さつ州しゅうの人ひと乃すなはち事こと話わなり。蛇へびは  
 蛇へびく穴あな出い始はじく。電いんし。雷らいす。つら。夏なつは。冬ふゆは。蛇へび把つか  
 の実み熟じやくす。元もと朝あのこは。今いまふ。正ただ之し五ご九くの四よ月げつを

國人吉月と名はきく。婦女海道よ出る神を祥  
して福以祈ふ。傳信滌よ裁る。

○二月十二日、家くくして汲井し。女子八井の水を汲  
く。顔を洗ふ。此中水は、疾病以免ゆ。と云は月  
や。土筆、萌出。海棠、春菊、百合の花満元。蟋蟀、蟬、

○三月上巳の節、うとて社来。艾糕を作く。餠、石竹、  
薔薇、罌粟、以不花咲く。紫蘇、生。麥、秋。虹、始  
く。又。

○四月、さく事、後。鉄線、并に、筆出、蝸、鳴き、蚯蚓  
出。蟬、鳴。芭蕉、実を結ふ。國人、是、以、井、邊、と、云、く。

○五月、端午。角黍を祀す。蒲酒を飲事、日本のめ。

此月、稲、登る。吉、日、以、送、く。稲の、神を、な、り。忽、し  
て、後、新、収、む。と、云、り。明の、夏子、陽、使、録、を、云。國中、小  
女王、と、い、ふ、神、有、り。土、土の、姉、妹。世、く、神の、事、を、傳、

是、に、以、り。五穀、成、時、不、及、く。け、神、女、不、く、と、云、り。神、徳  
を、採、く、と、い、ふ、神、傳、い、ふ、其、女王の、喜、ぶ、前、に、獲  
入、る、福、を、合、ふ、時、に、之、不、小、合、以、其、不、申、意。稲、登、人  
絶、て、無、し。此、月、蓮の花、咲、く。施、石、榴、熟、す。

○六月の節、うと。六月の、節、中、に、陰、飯、を、蒸、く、送、く。  
此、月、也。沙、魚、岸、に、登、り、て、床、と、云、り。鹿、も、暑、を、畏、



引ぬ。海辺に生く水蛭晒す。年化して海魚と  
なる。括梗枝葉花并く。

○七月十二日。門外小追火の炬火照して先祀を  
迎へ十五日の盆伎など。見事し。事なり  
は月。竜眼肉実瓜結ぶ。

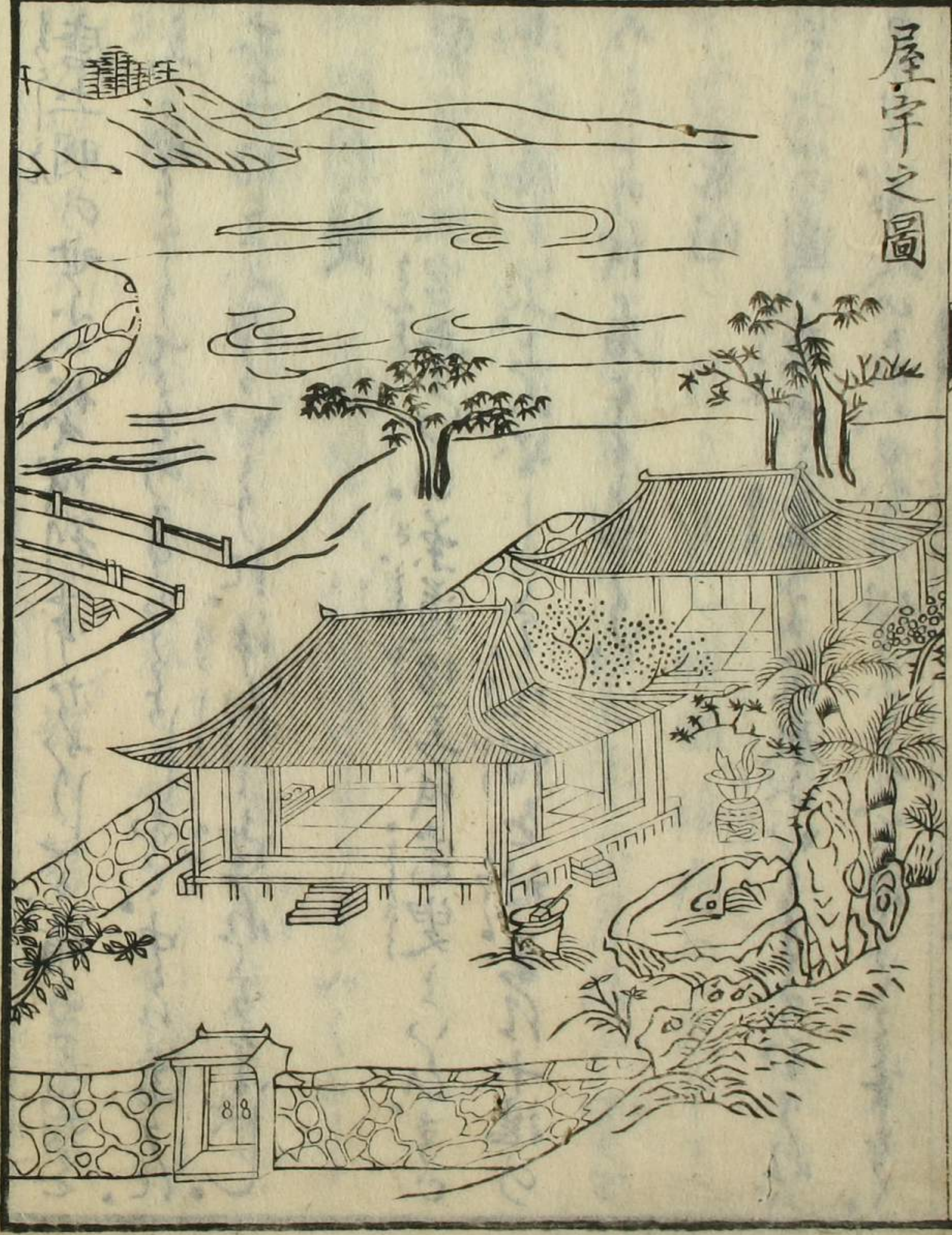
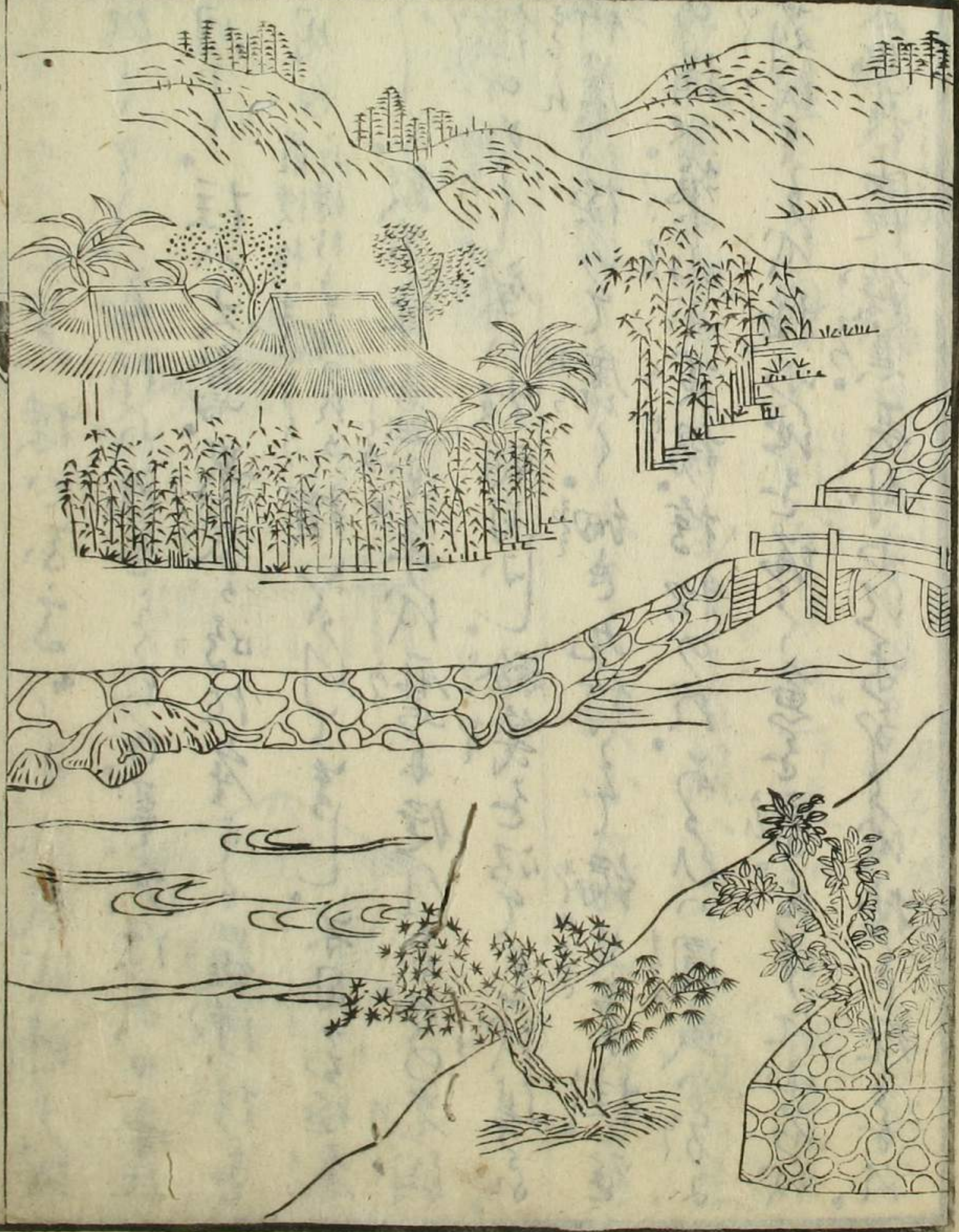
○八月十六夜。月を拜む。白露瓜八月の節なりし  
赤紐を借る。お物々。其前後二日。男男女女戸  
開く。業以休む。是を守天孫と号す。け間小角  
つたれぬ。かかへば蛇小齧りく。木芙蓉花  
花さく。

○九月梅花開花。お物々。事なり。蛇  
をさす。害をなす。此月の蛇小傷けらる。主  
どる。お死に放す。八月の守天孫小。三日間法志  
ひたり。田八畝く。鰻土じし。麦の種を下す。  
○十月蛇穴小塾し。虹落く。見えたり。小児の紙  
紙あぐ。

○十一月。お物々。を葉開花。約記紅小をづき。蛇  
をぬけ。其外小。事なり。

○十二月。庚子庚午小。節なり。日に。糯米の粉を  
授の葉なり。二重四をに包み。蕨葉めくじ。







十里番よりふ末代も羅と云。け木のりりハ産  
物以部小載り。民及ハ竹の穂牆あり。栗廩  
ハ麻めを四五尺。麻下小十六本の柱を施し  
其間以人の行扱やりにけり。官倉皆かく  
のめ。村落あり。各合々一亭を修り。米を  
て中小倉先日紙おて守壁をとりてん

○器戕圖説

食器の爲方。器概にわたりて。惣て日本の  
制小致小。王宮の給仕ハ里之子なり。二人宛採  
への技を器。進退小並系流をりらゆ。つふ

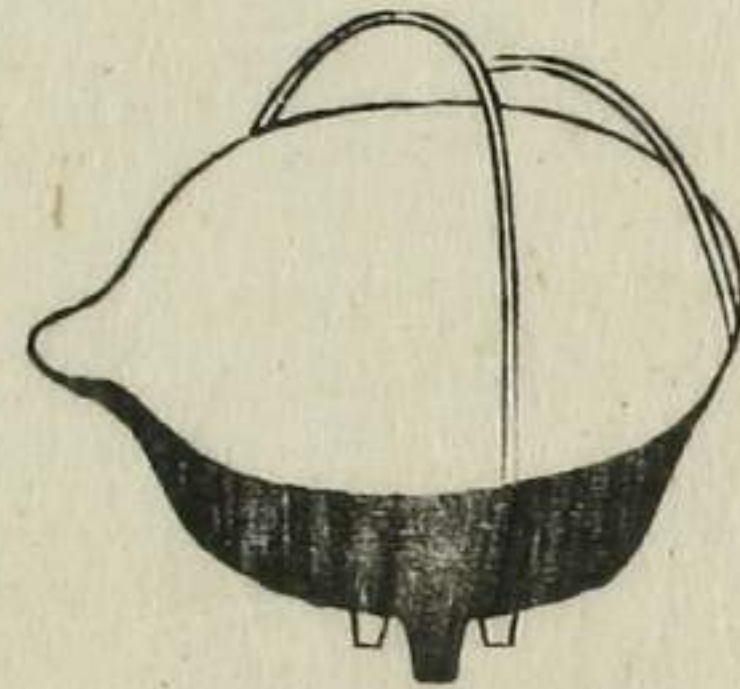
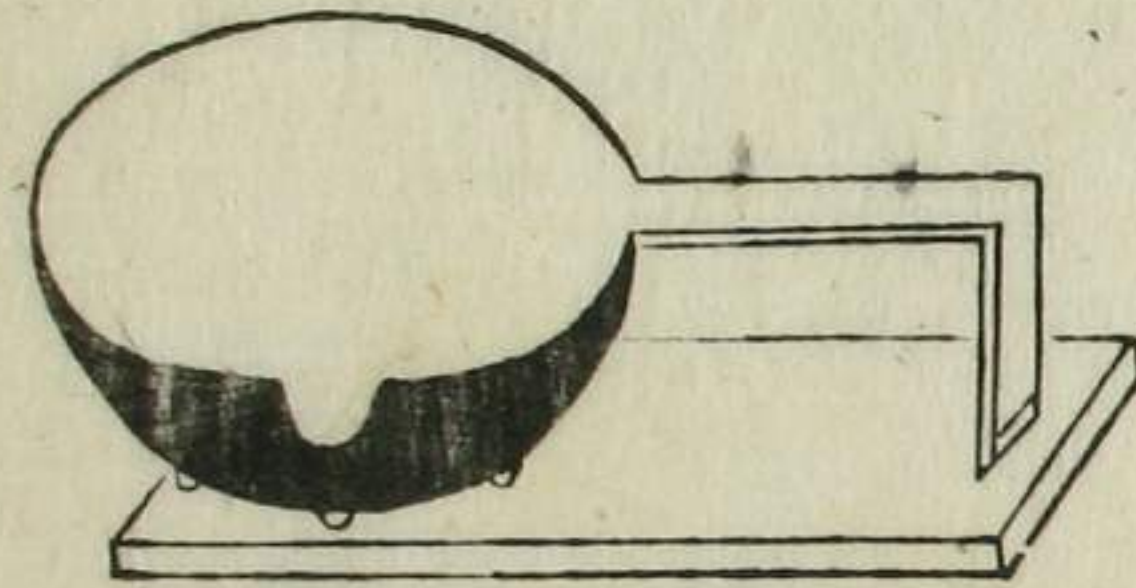
仍後より事なるよりあり。定西法師傳也。け書ハ  
琉球へ渡り。一衣ハ紫へ。一衣ハ裏へ。天正年中  
道心となり。つふの傳なり。琉球の習ひ。新毎に地  
づき。はちより。海へ小丘ハ食器紙たをりつと  
紀より。今もあつあや。

○女市

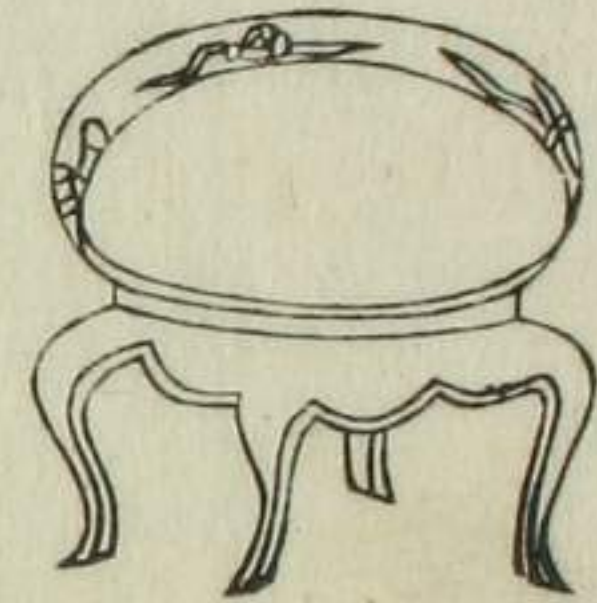
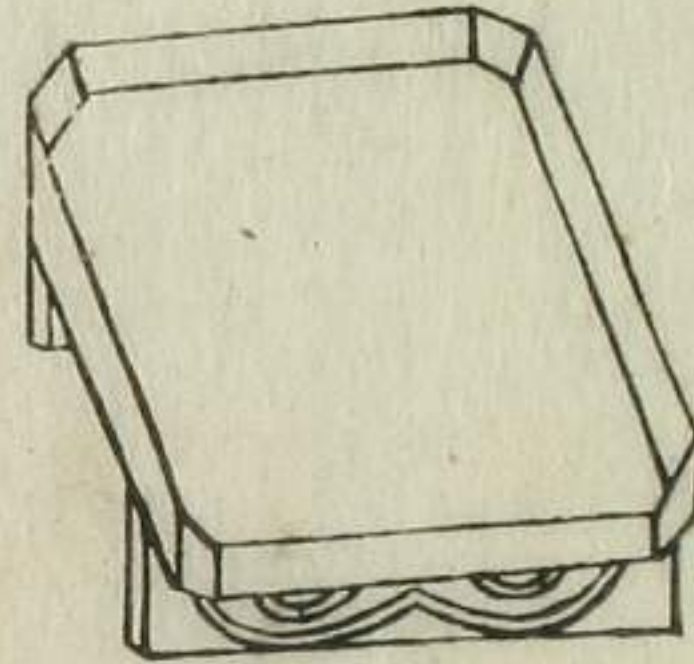
此國中过山といふ耶の海沿ハ早晚兩燈市あり。  
商人ハ砂と女あり。商人ハ取のとのハ魚蝦蕃薯  
豆腐木器磁碟陶器木梳草鞆等の産物あり。  
其貨物。何れもど首小戴き。披にせり。山嶺を下  
り。偏に。賣買ハ日かの錢を用也。古ハハ浩武

鍋

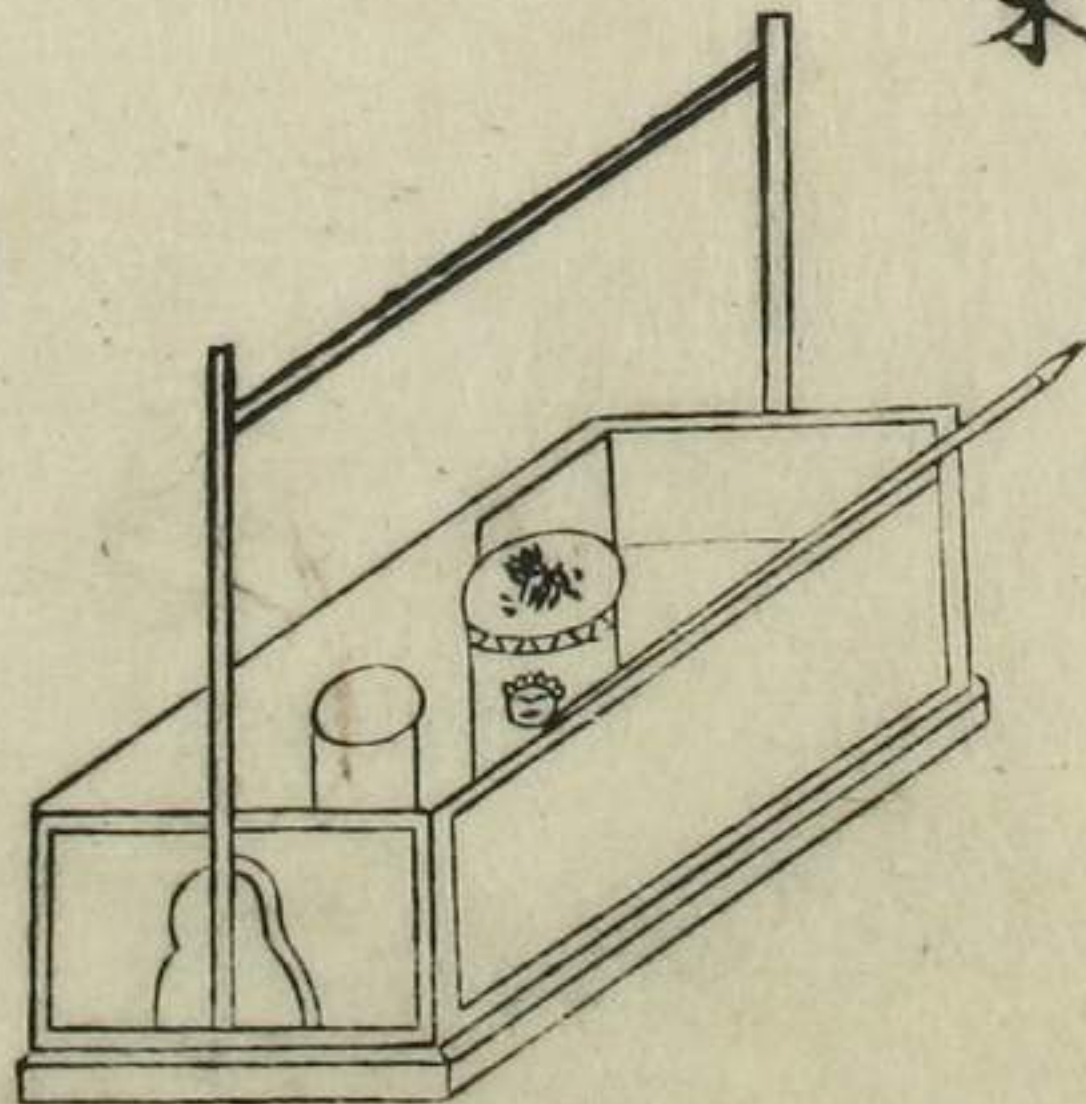
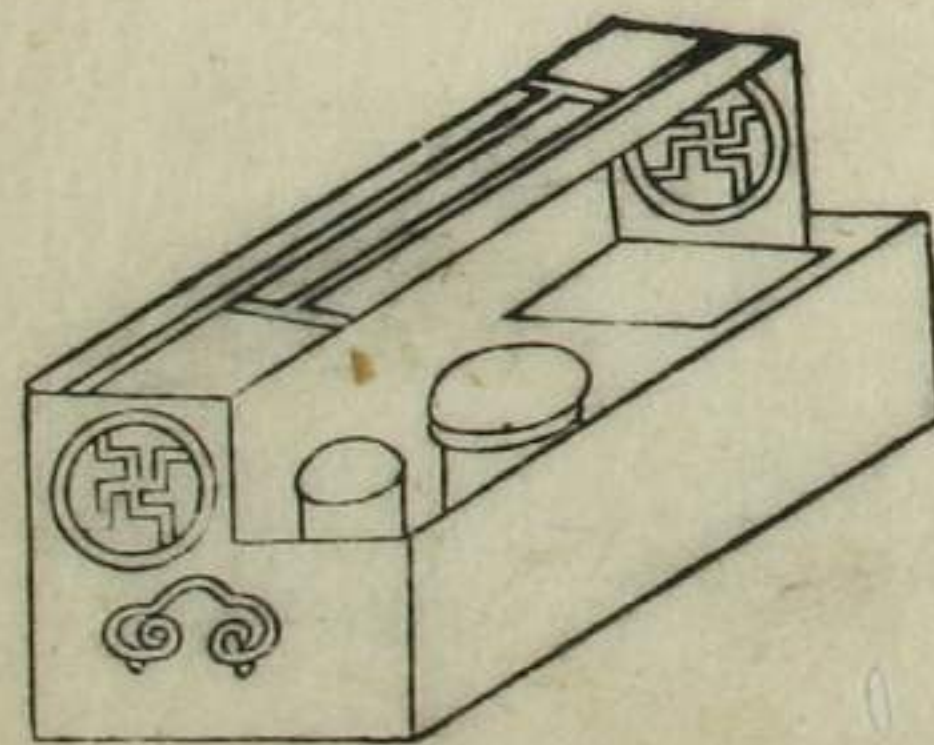
いづれも  
後濁  
り



膳

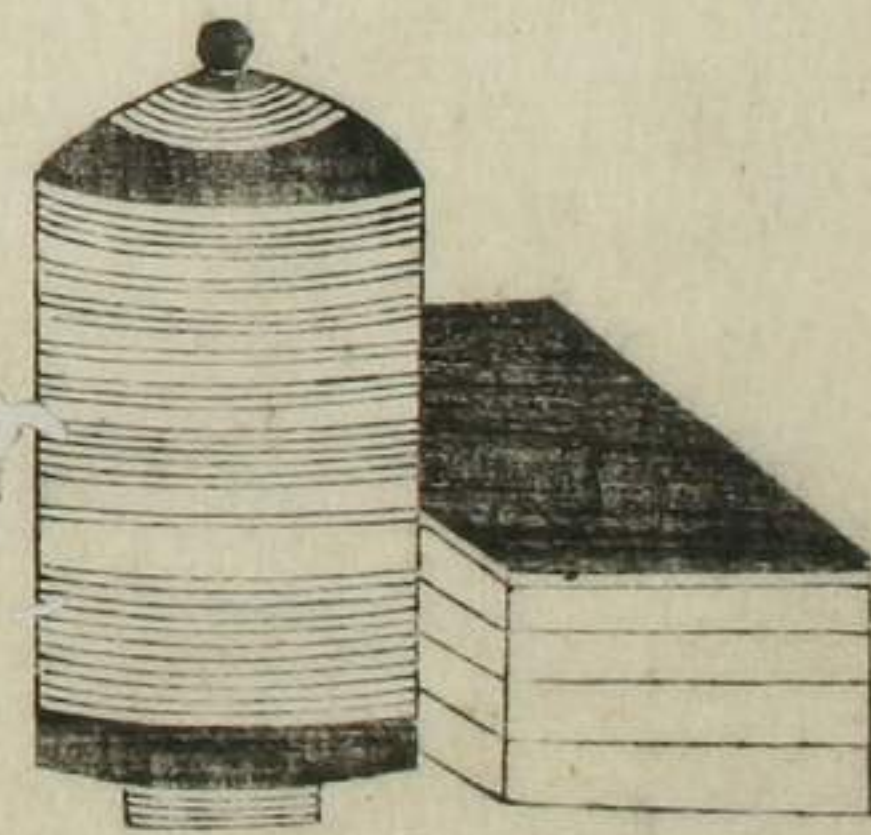
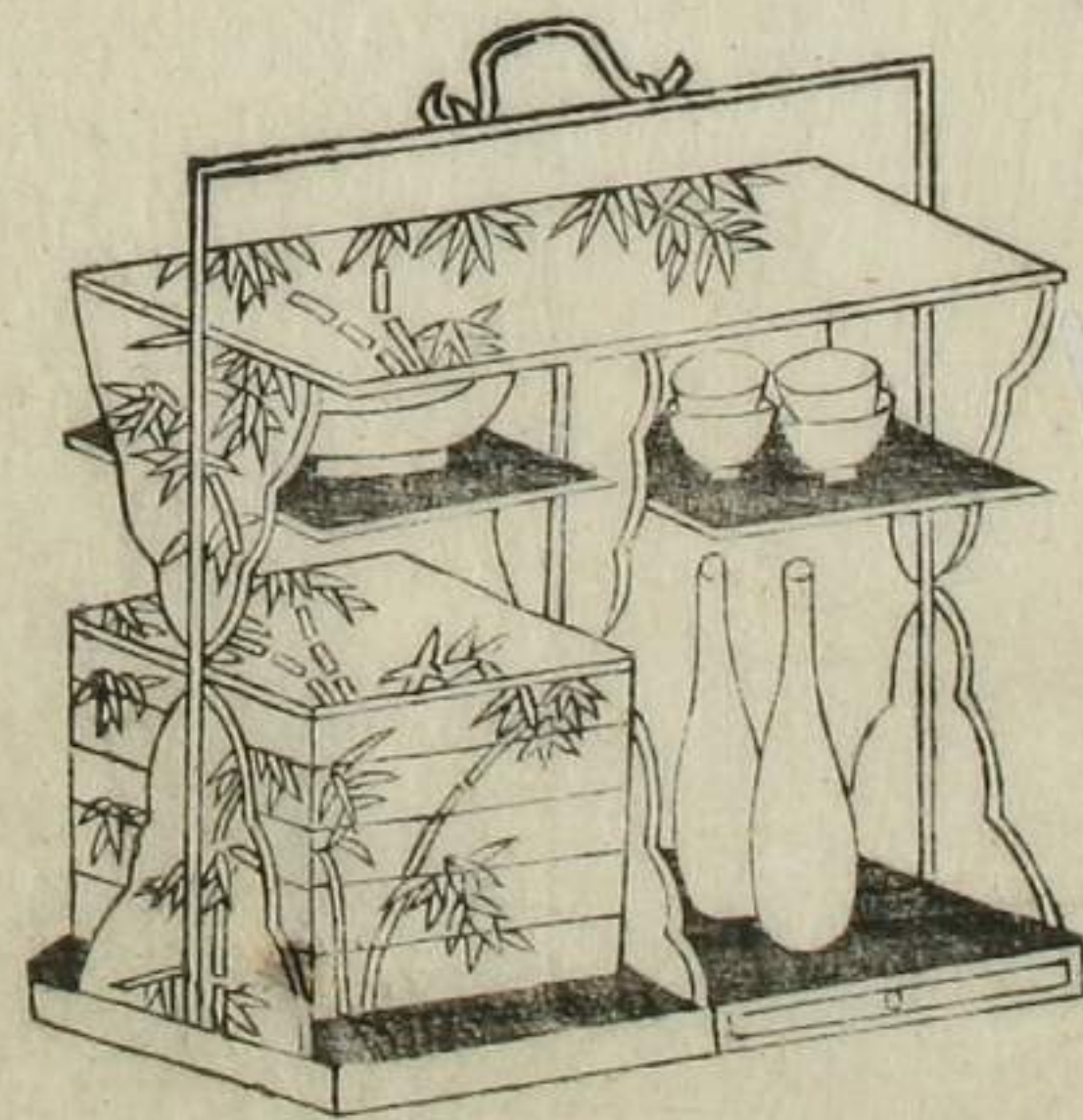


烟架

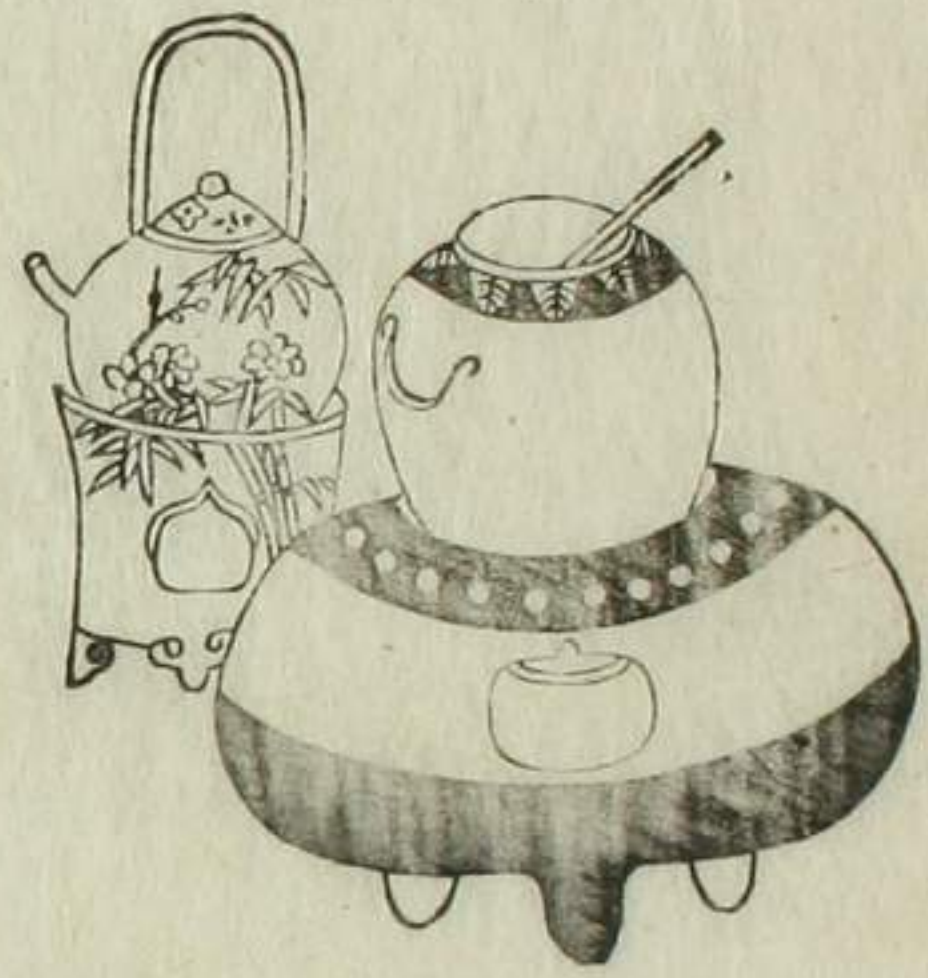


盥

食盥



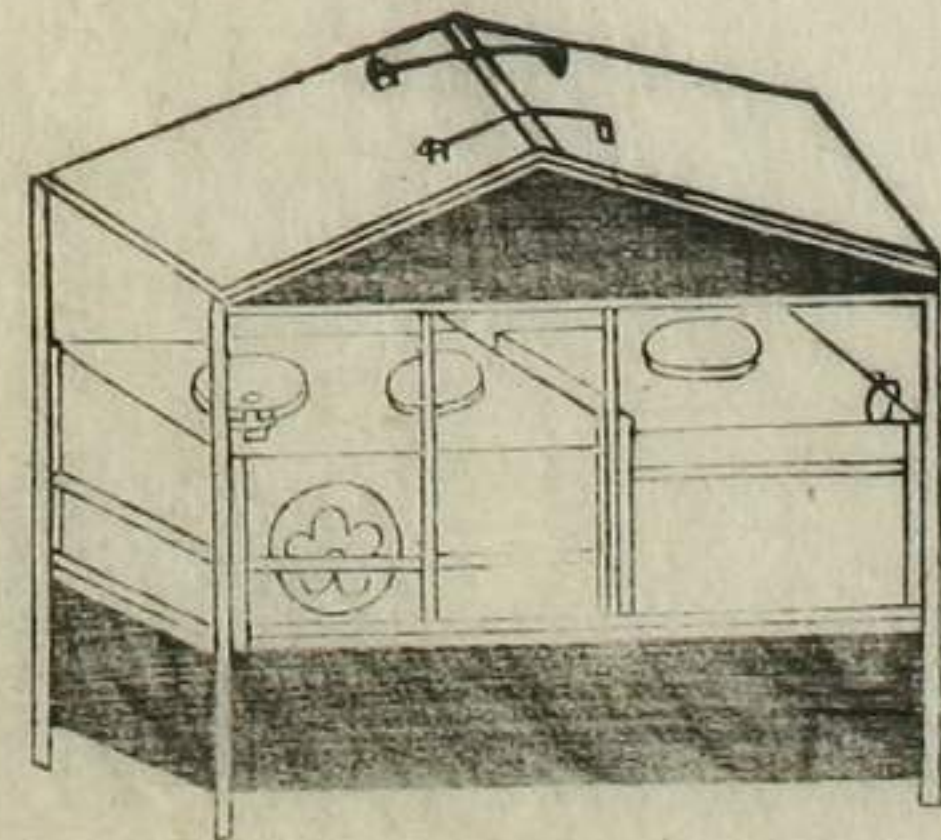
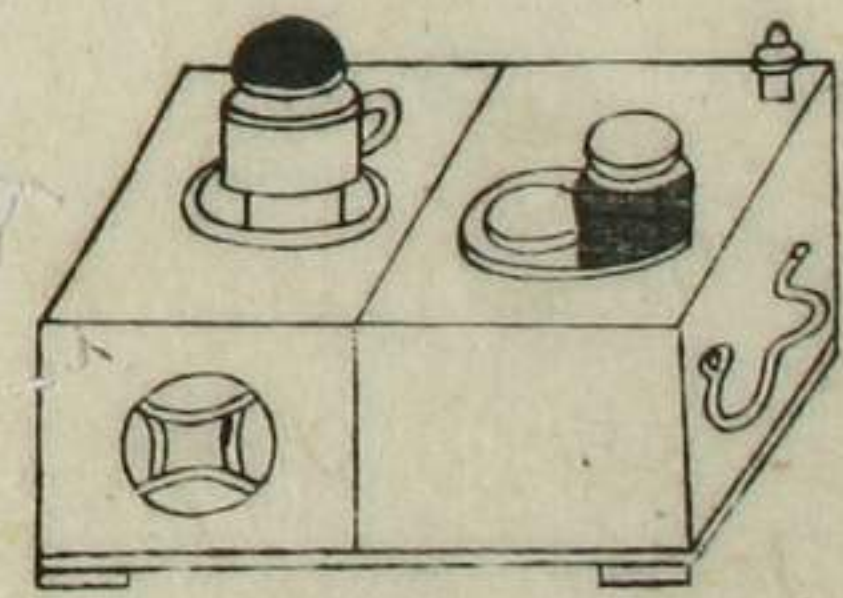
火鑪



足ハ  
産カ  
ツノビ  
角火取と  
名付  
この  
なり



水火鑪

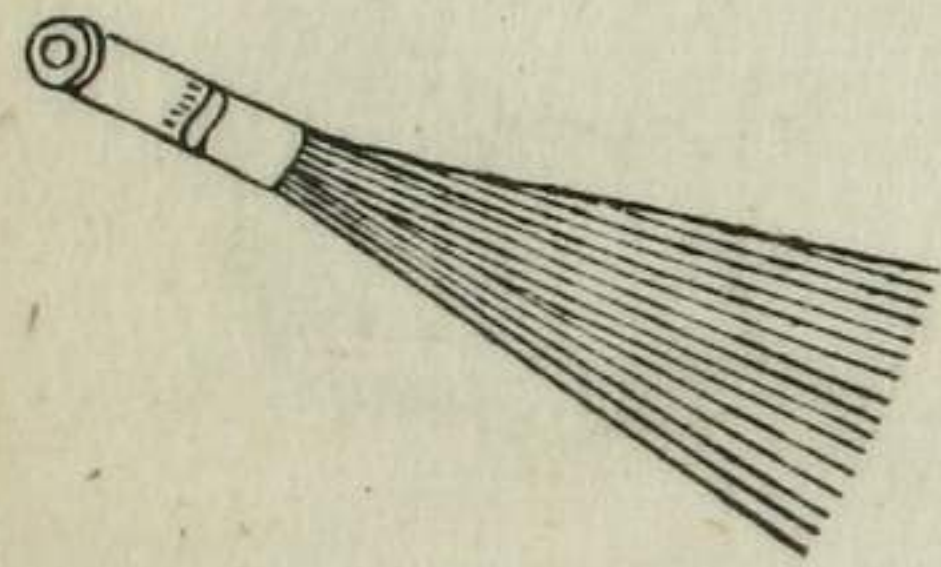


茶甌

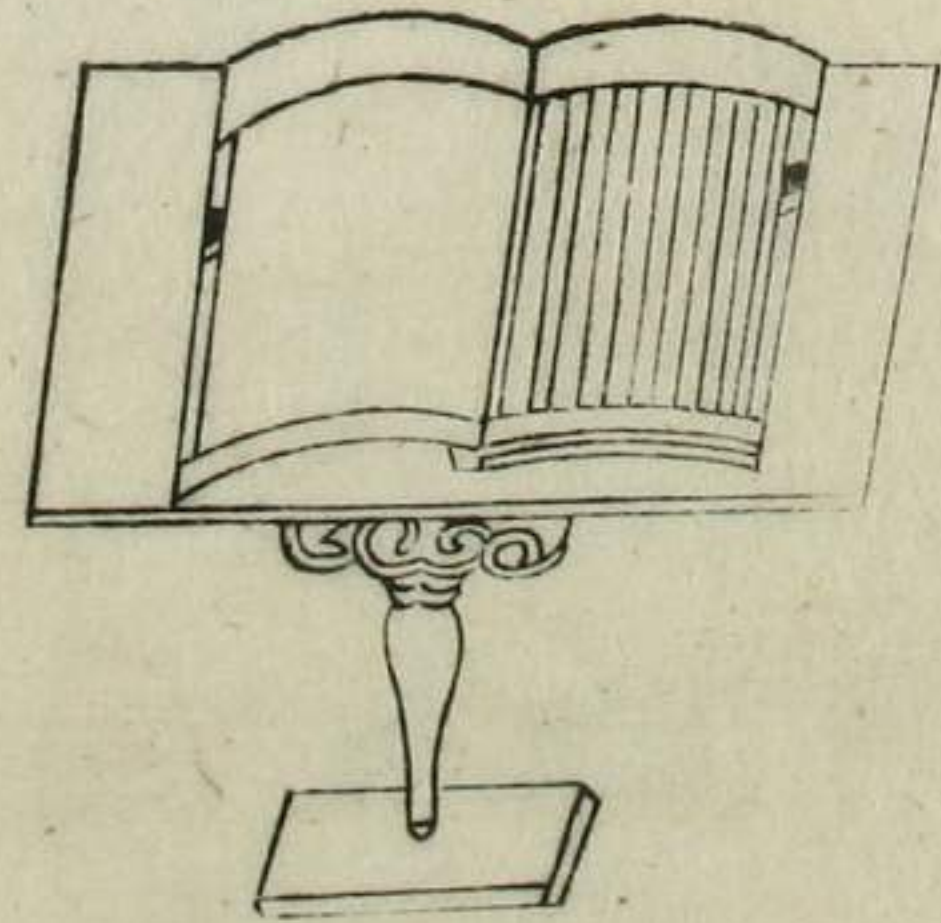


花  
茶  
花  
茶  
花  
茶

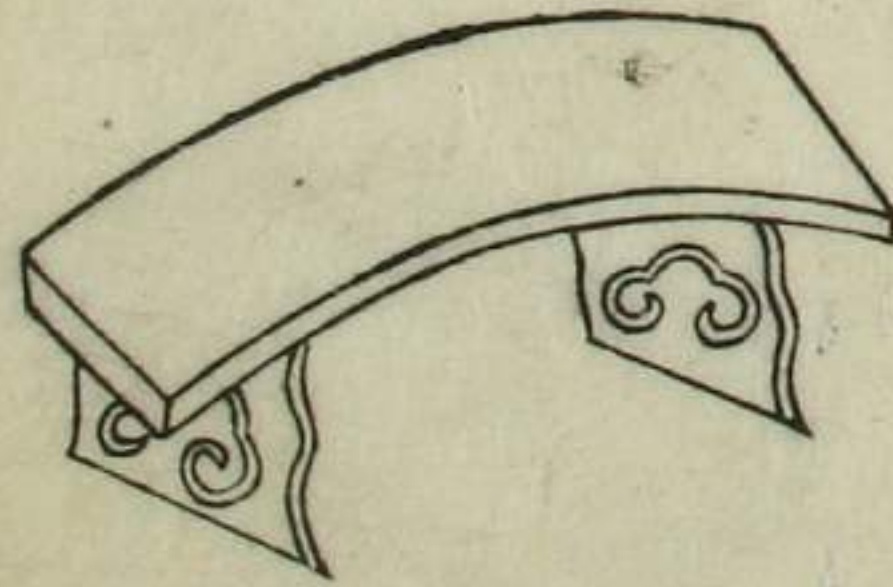
茶筌



書架

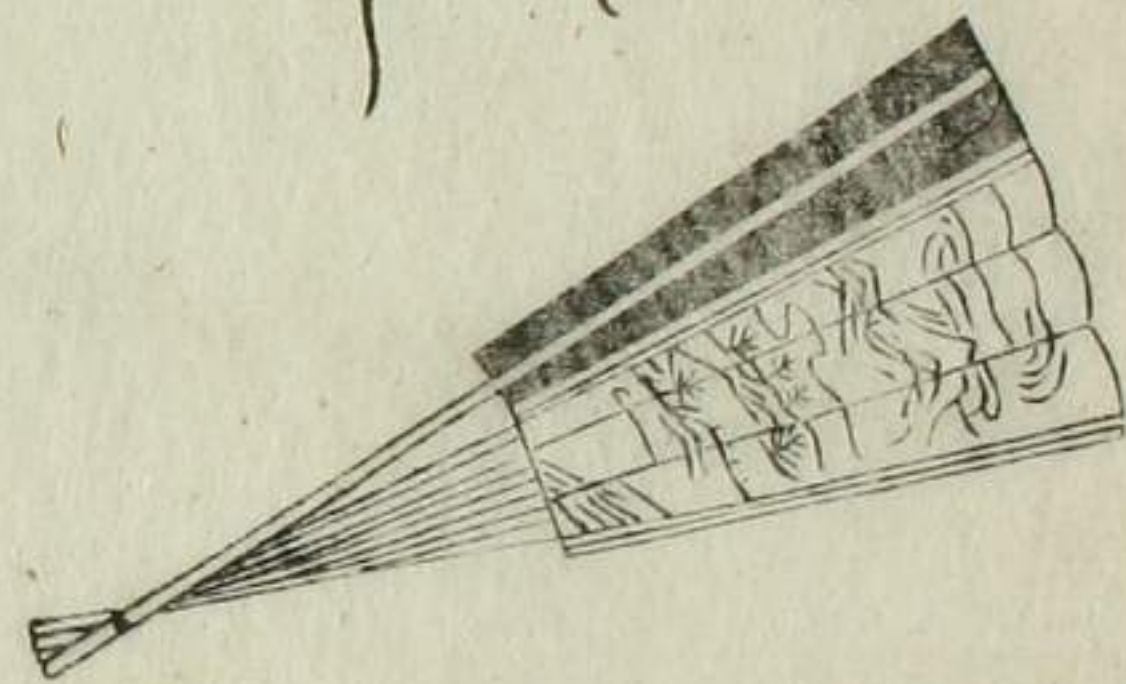


曲隠几

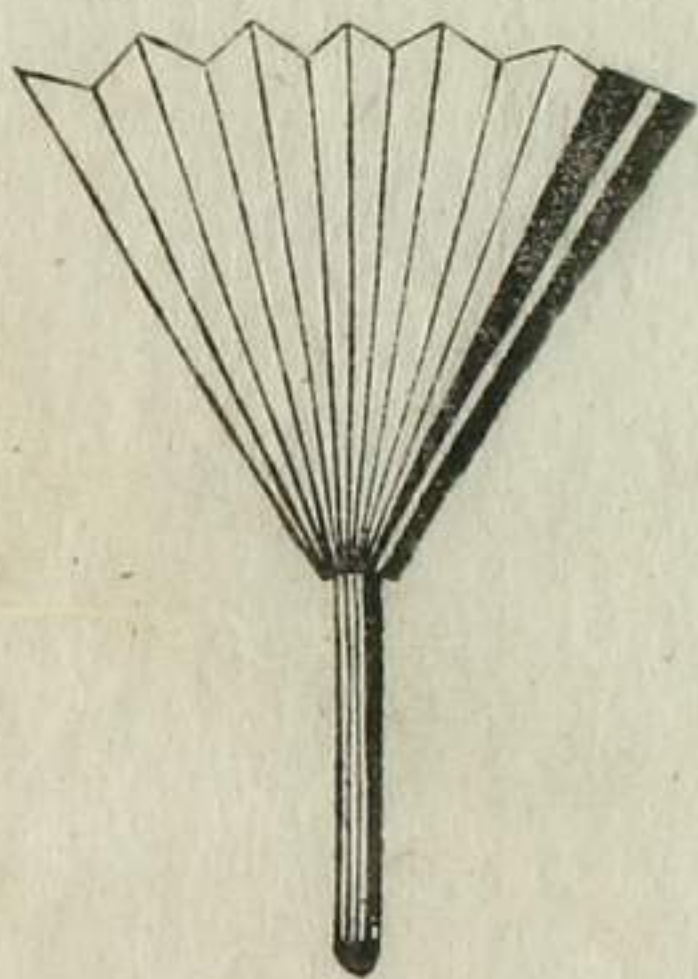


扇 二品

折扇紙  
權子扇と  
名づく  
帯にさき  
りゆかの  
め

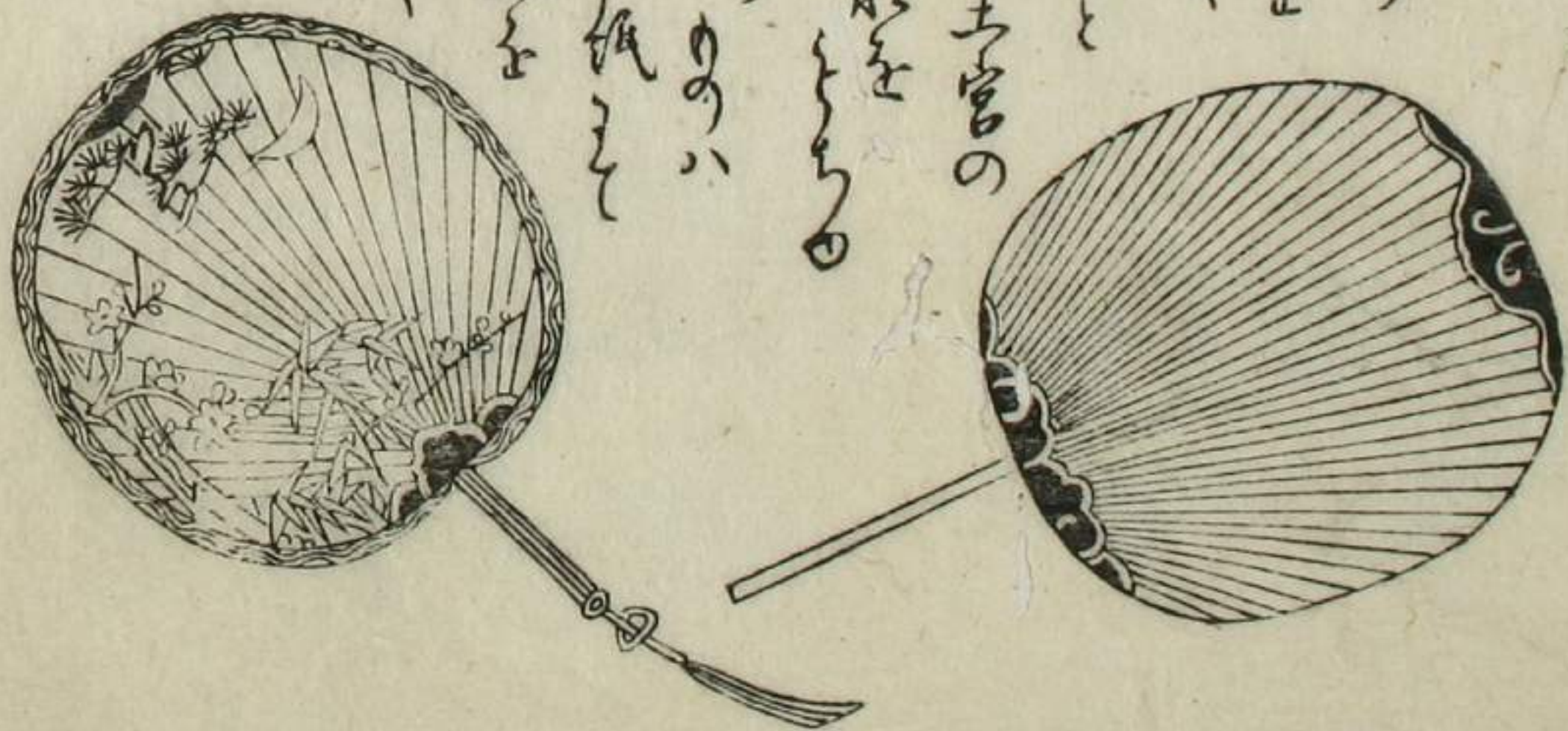


素廣ハ  
信家不  
ゆらゆ  
俗人の  
扇の毛



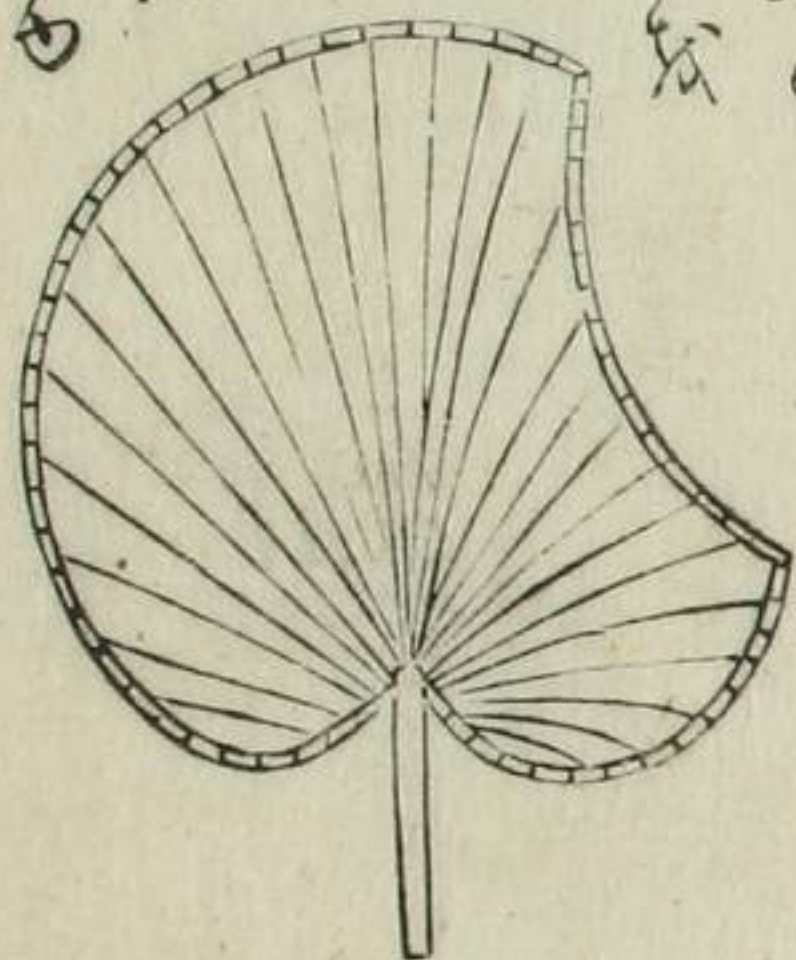
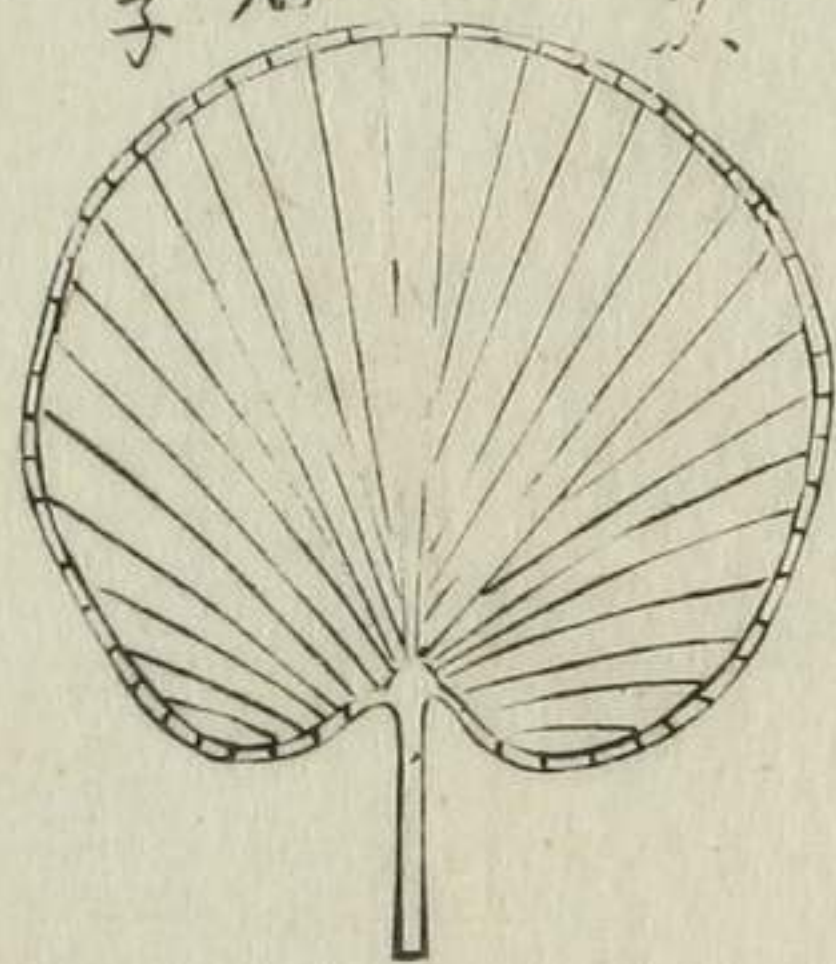
團扇 二種

金泥入り  
彩色紙を  
用ふる紙  
玉團扇と  
名づく玉宮の  
婦人の紙を  
常用の  
白青紙紙を  
法匠の画を  
畫く

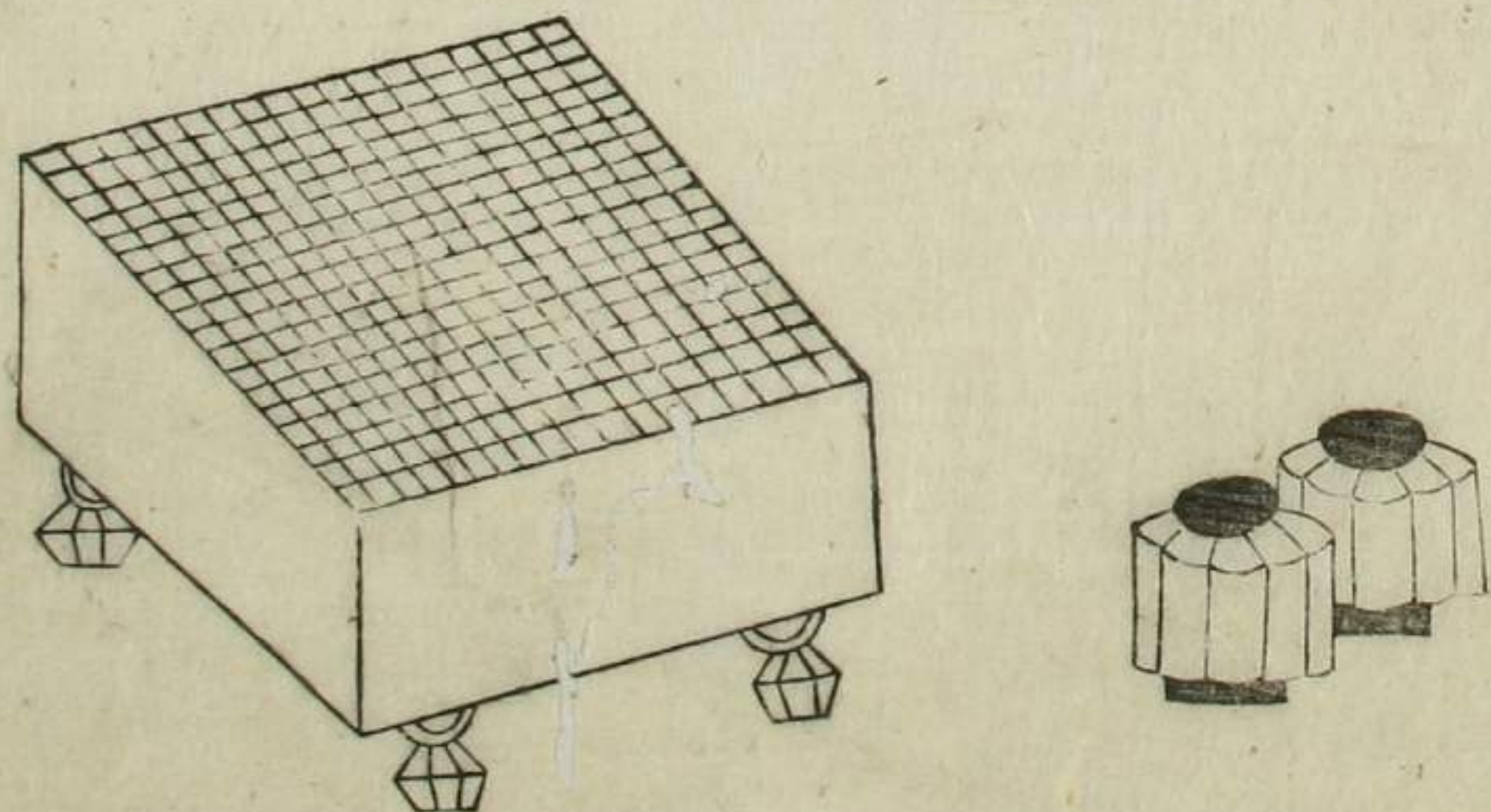


蕉扇 二品

此邦を以て  
換桐園  
なり丸き  
方以日扇  
といふ男子  
の用ゆ  
其傍を鉄  
半月つめく  
ゆらゆら  
扇と  
名づく  
婦人の  
用ゆ



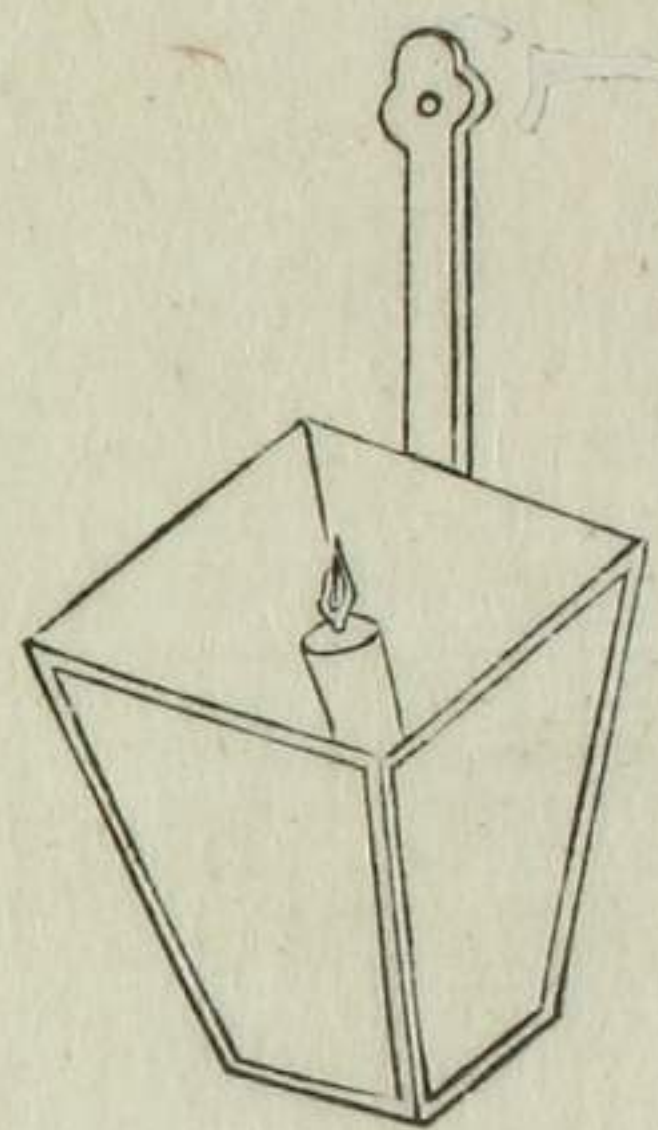
棋局





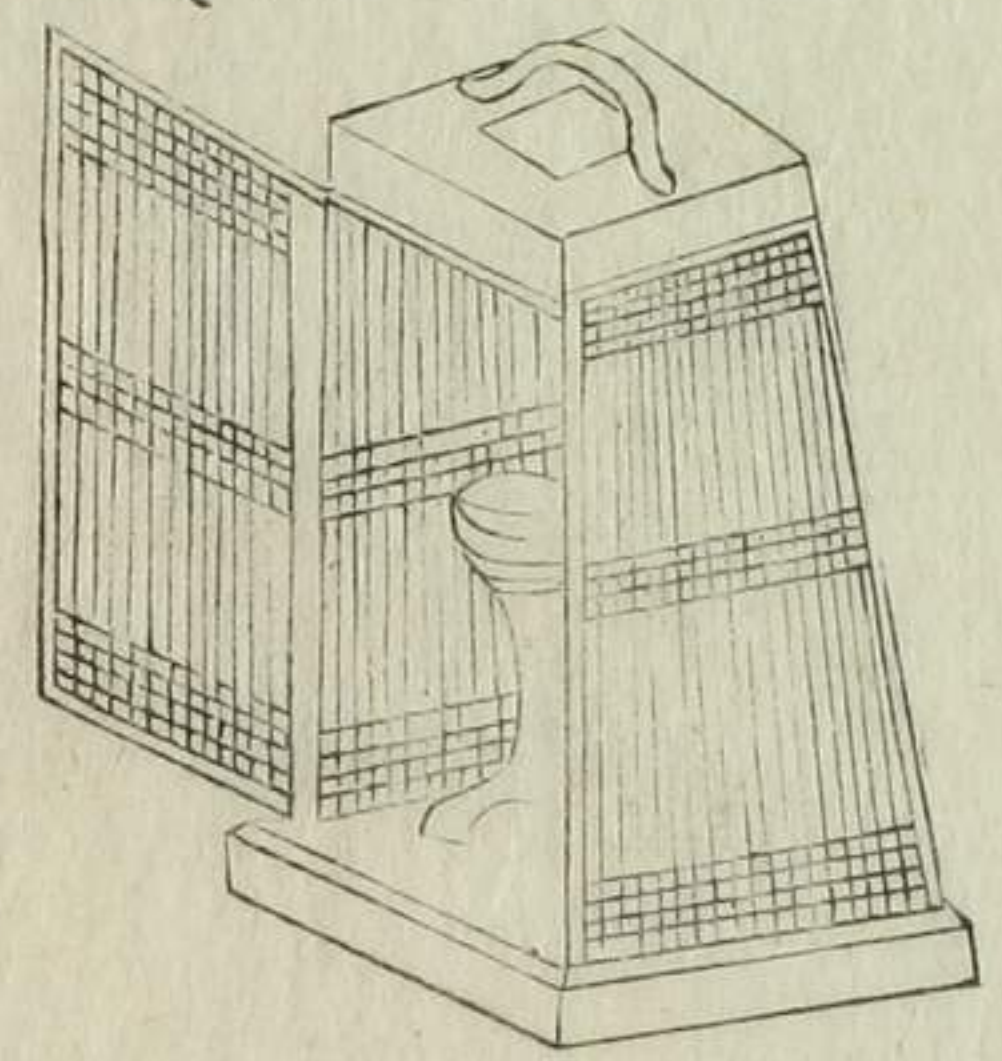
燭

白帟少く法文中  
めく用也

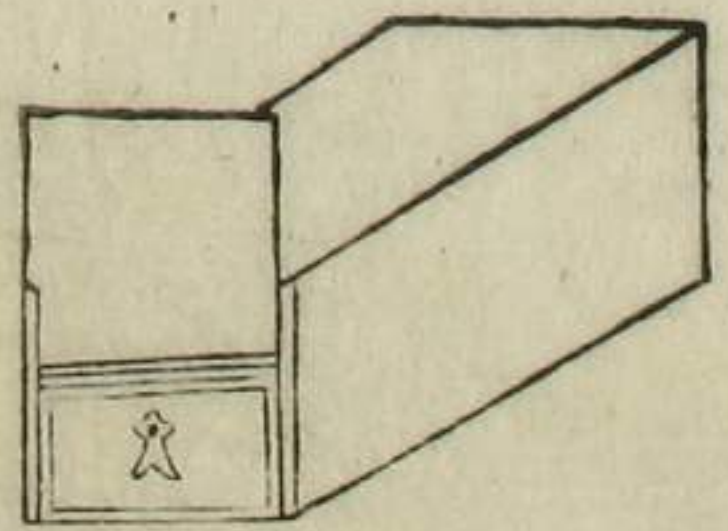
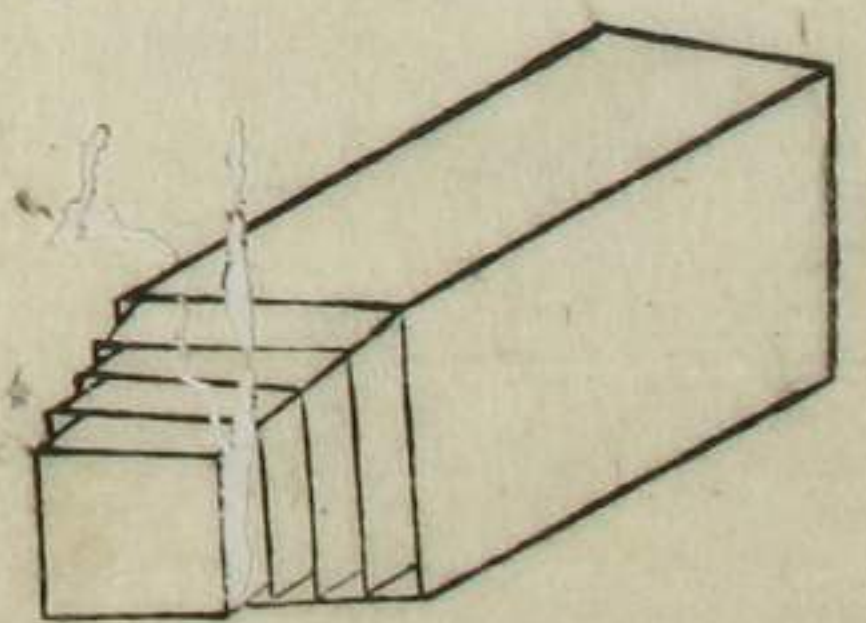


燈

あしどりの制他  
可本と  
同ト  
氏同ハ  
皆  
仲火を  
用也

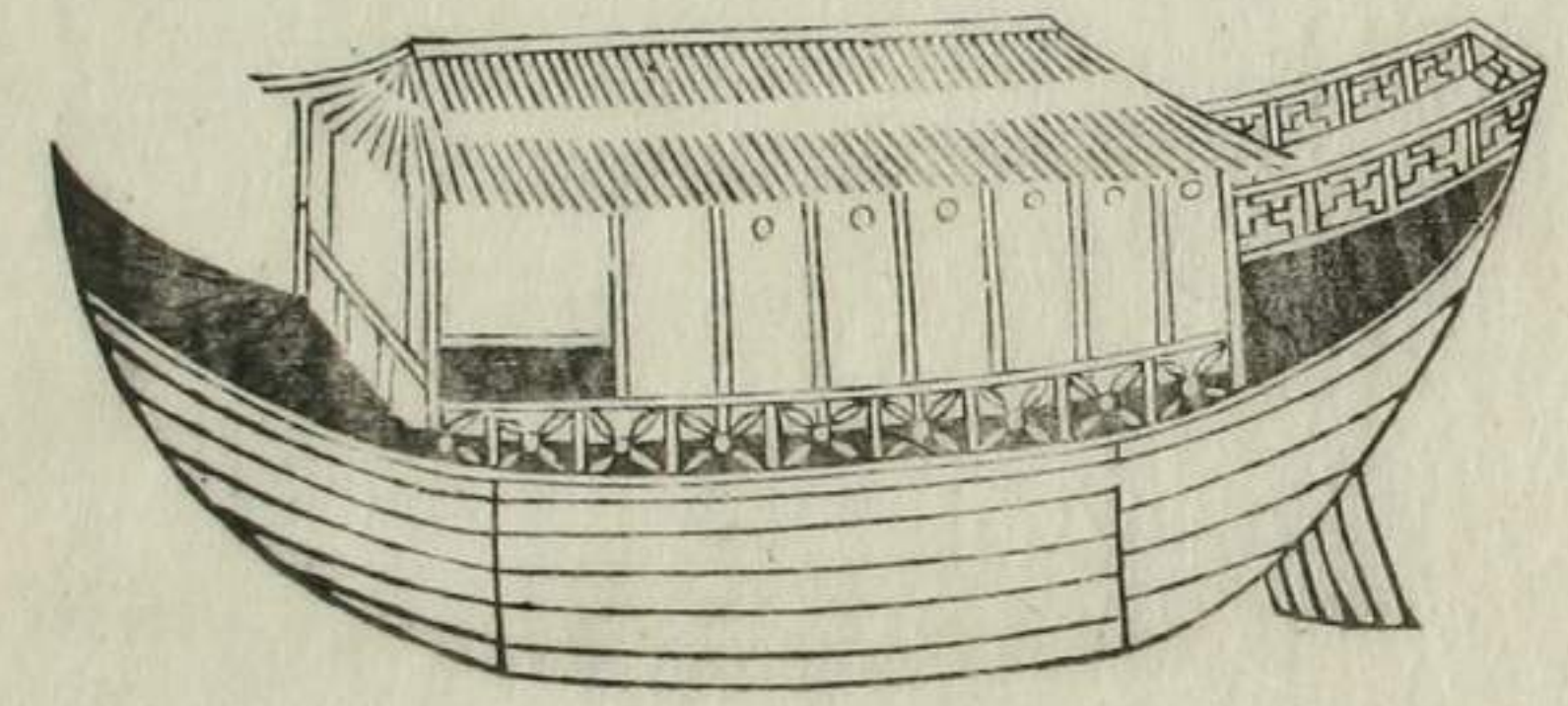


套枕 二品



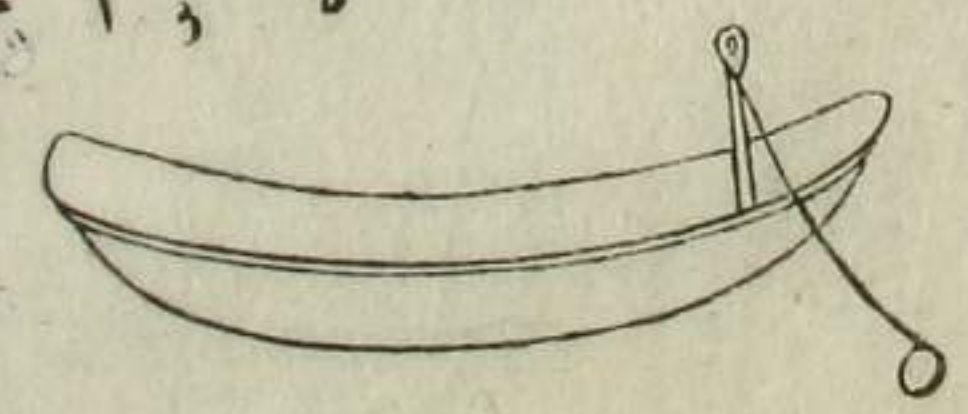
太平山船

唐日如(後海)  
より船(福州)  
船の也(同金)  
中の略くを  
付来さる船  
いつきもは船  
の欄杆をき  
そのあり太平  
山といふ所の  
船のみりて  
かく欄杆  
なり

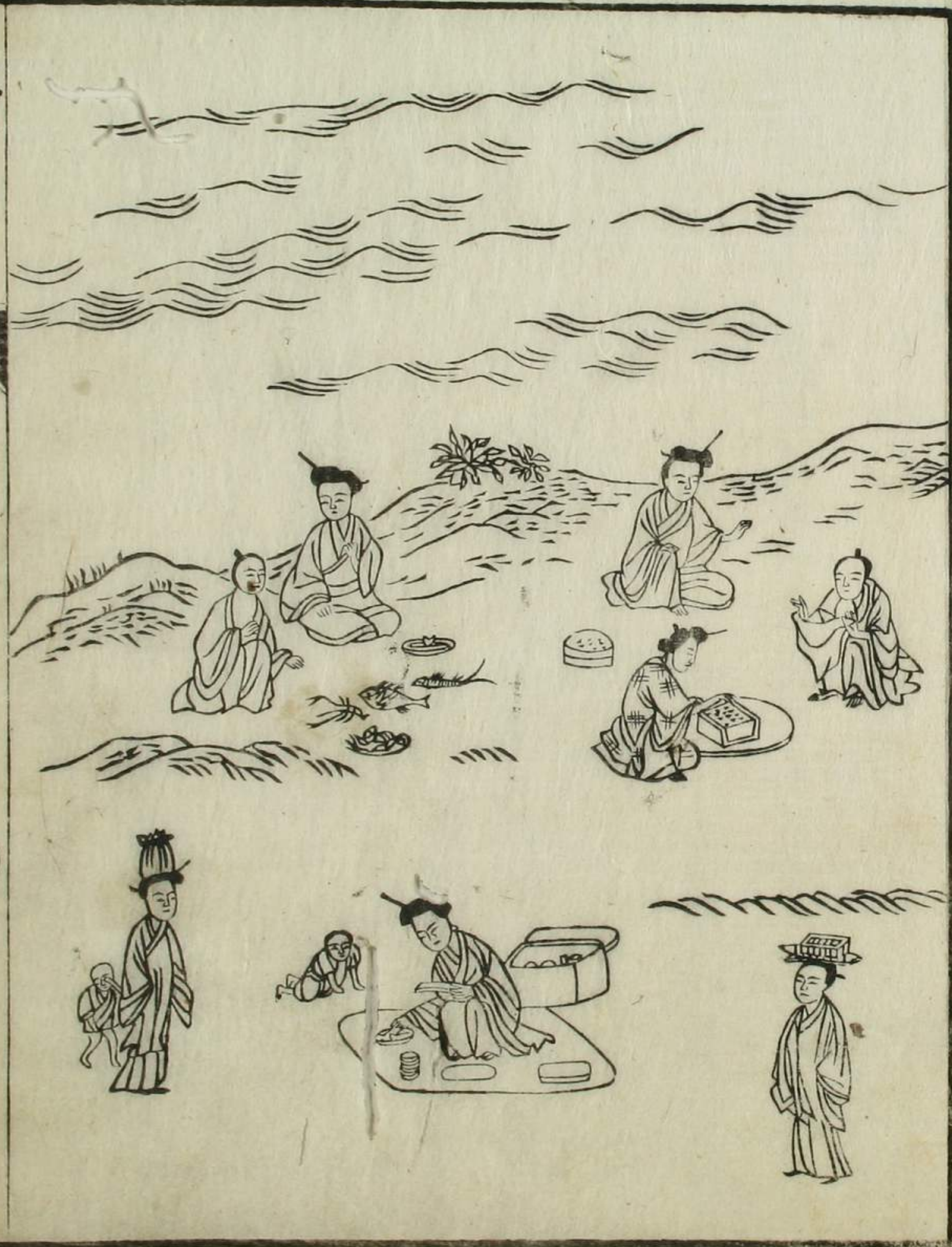


獨木船

是ハ一本  
の独り  
漁者  
舟也  
舟の  
なり  
くして  
舟  
あり  
一艘  
舟の  
の  
なり







通宝。永樂通寶。唐土より此代へ流して通用せしが、今所ハくもつていふれり。只寛永通宝のこま

○婦人の風俗

大家の女子ハ。金浪の簪、月丸の氏家の婦女ハ。玳瑁のくはり、くはり紙挿なり。其形ハ、上ハ高きうめし。外ハ首飾なり。脇粉をも用る。髪の色ハ、玉く長く。脊丈よ短く。人歩、短く。小ハ、半襪、履木套を履きあり。赤赤足く歩むも有り。何れも手の拵は甲に懸き。拵の端の中、小黒甲を入

より、血ぎまを、女子十五歳、小なれを、針を刺。黒紙入。まより、年く、小増加あり。其紙も小。皆然。三才圖會に、女人ハ、黒を以て、龍蛇の紋。紙黠、くはり、紙をハ、け事を、中、當時尚益と。國王、女子の黠を、止ると。衆紙集、く、評議あり。小。上古よりの習い、なれ。今、文制を、改め、人。如何なり。衆紙、一、決、と、バ。國王も、好方なく。其。街を、往、来、に。天、の、布、紙、多、く、持、つ、良、家の、女、を、衣、の、襟、は、紅、の、綴、紙、を、く、小、女、を、抱、く、小、ハ、片、手

小児の腰拭とく。腰骨かけく歩むなり。  
女市の島より定西法師傳ふ云。琉球ハ糸文天の鸞  
なりとて。男子より女紙教ふとたり。

○嚏を好む

琉球人ハ壽命の業なりとて。嚏を好む紙好む。  
客ハ對するも。紙條紙鼻孔へ今く入りて  
をぬく。落ぬ人の仕緒り也。

○奇舞

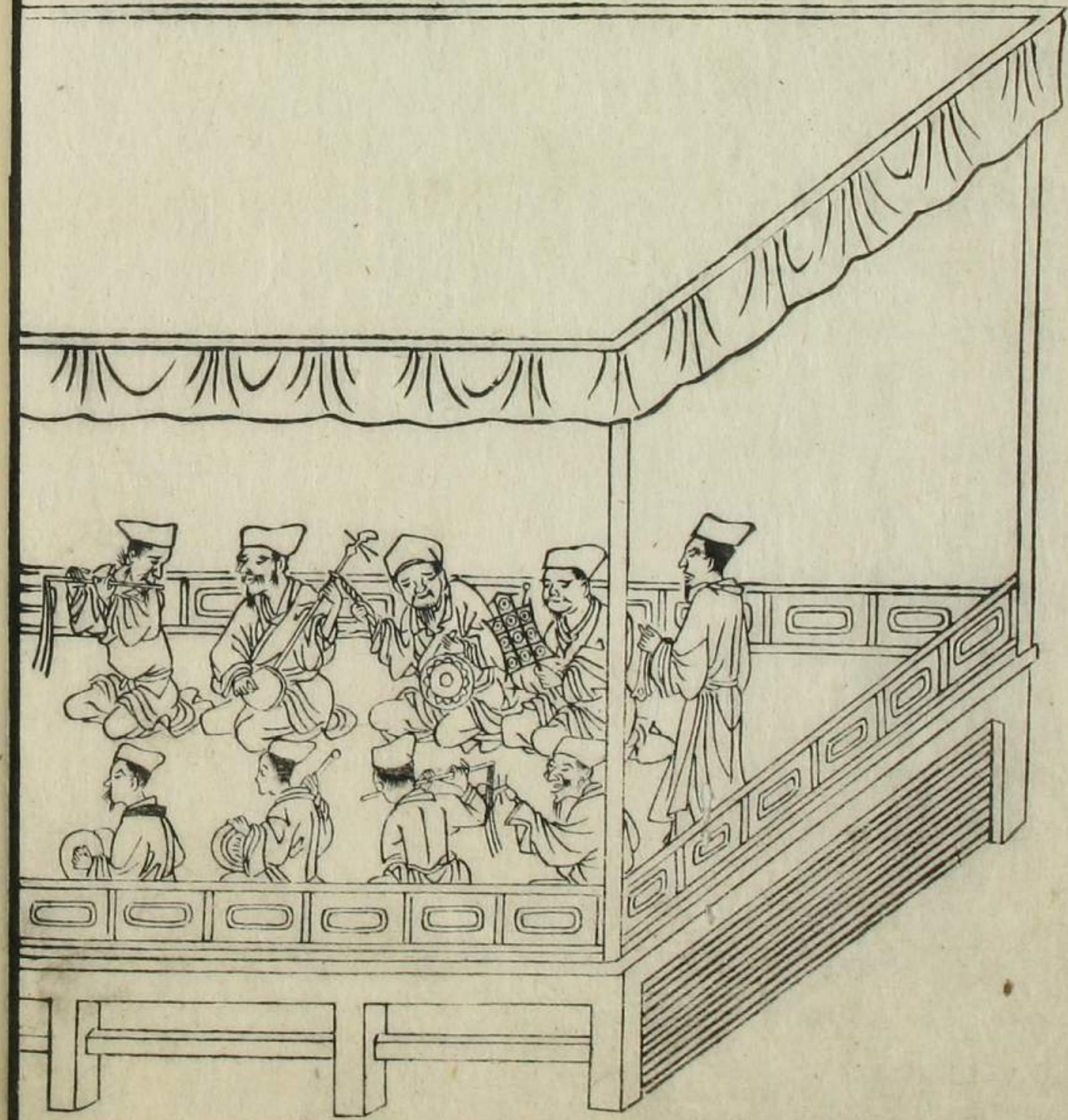
王宮ありて奇舞を真初とる時ハ。五ノ突四  
面の舞臺紙造り。四方小幕を張る。樂人ハ

紅衣縁衣を着し。丈くの中紙裁き。蛇の  
皮めく張る三弦。提琴。笛。小鑼。鼓など紙持て。  
二行小ならび。由りやう。樂譜紙教へむ。皆く有  
く。階をうの幔を裏げ。舞人出るなり。  
○小童四人。朱き襪紙履。五色の長靴を。襪は  
一。頭子更皮めく仰り。るまゝ。朱儀の付る  
を裁き。廻旋場小登り。樂人の方へ向ひて。紙  
樂上。其の紙やう。朱儀を臺の上へ捲けり  
あふれ。童子けりて立上り。足指子。曲節  
に合せて舞ふ。此紙等舞と名付く。





琉球之舞之圖  
 毬球樂  
 琉球



かみき舞ふ。獅子ハ程くのねひをけし。ま真  
ある曲をうりし。是を球舞といふ。

○小童三人。さるやふ。粒ひて。場は登り。樂人より  
一尺。むりたり。金様の桿。杖法を。交撃す。

舞ふは曲。杖桿舞といふ。

○小童四人。まふ。三尺むりりの竿。小花の付る  
を。各一本。宛ぶら。うりし。音あを。竿舞といふ。

此外。舞ふ。扇曲。掌節曲。小童三人。あは  
し。音あり。樂あ。

太平調

長生苑

芷蘭香

天孫太平歌

桃花源

揚香

壽尊翁

是等の外。數曲あり。此内。桃花源。揚香。明  
樂あり。壽尊翁。八。清朝の樂あり。又神音と  
いふゆあり。日中の式。三番のぬく。國樂を奏  
し。始。一老人の形。お打。場は登り。此  
曲を。あふ。は。混。世は。御し。  
神聖天孫氏。世くの國王。位。登。毎。形を  
現。て。靈。結。を。あ。は。か。ら。迎。神の歌。杖  
製。し。く。り。つ。て。あ。れ。を。歡。樂。後。世。よ。う。て  
沖。三。を。く。形。を。現。ぞ。お。神。代。より。遣。り。る



唱<sup>うた</sup>奇<sup>き</sup>を傳<sup>つた</sup>へて。玉玉昂<sup>たか</sup>位<sup>ゐ</sup>の時<sup>とき</sup>。格<sup>かく</sup>別<sup>べつ</sup>の儀<sup>ぎ</sup>式<sup>しき</sup>  
あり。時<sup>とき</sup>は曲<sup>まが</sup>成<sup>なり</sup>行<sup>ゆ</sup>ふ。神<sup>かみ</sup>奇<sup>き</sup>を唱<sup>うた</sup>へる。同<sup>どう</sup>ハ坐<sup>ま</sup>後<sup>ご</sup>  
ともよみを出<sup>だ</sup>す。と云<sup>い</sup>ふ。

○俳<sup>ひ</sup>優<sup>ゆう</sup>

舞<sup>ま</sup>樂<sup>がく</sup>小<sup>こ</sup>續<sup>つ</sup>きて俳<sup>ひ</sup>優<sup>ゆう</sup>あり。其<sup>その</sup>れ云<sup>い</sup>ふ。鶴<sup>つる</sup>龜<sup>かめ</sup>  
とらる。兄<sup>あに</sup>才<sup>さい</sup>の幸<sup>さち</sup>。父<sup>ちち</sup>の仇<sup>かたき</sup>成<sup>なり</sup>復<sup>かへ</sup>し。古<sup>ふる</sup>事<sup>こと</sup>  
あり。日<sup>ひ</sup>本<sup>ほん</sup>の弟<sup>あに</sup>我<sup>われ</sup>兄<sup>あに</sup>身<sup>み</sup>の敵<sup>たか</sup>討<sup>うち</sup>。鬚<sup>す</sup>髯<sup>ひげ</sup>に  
。昔<sup>むかし</sup>琉<sup>りゅう</sup>球<sup>きゅう</sup>國<sup>こく</sup>中<sup>ちゆう</sup>城<sup>じやう</sup>とらる。所<sup>ところ</sup>の按<sup>あ</sup>司<sup>し</sup>毛<sup>もう</sup>國<sup>こく</sup>昂<sup>かう</sup>と  
いふ人<sup>ひと</sup>忠<sup>ちゆう</sup>勇<sup>ゆう</sup>あり。て國<sup>くに</sup>成<sup>なり</sup>治<sup>ち</sup>む。其<sup>その</sup>れ勝<sup>かつ</sup>連<sup>れん</sup>  
の按<sup>あ</sup>司<sup>し</sup>阿<sup>あ</sup>公<sup>こう</sup>とらる者<sup>もの</sup>。若<sup>ごと</sup>くして郡<sup>ぐん</sup>馬<sup>ま</sup>とらる。城<sup>じやう</sup>

小<sup>こ</sup>方<sup>かた</sup>り。國<sup>くに</sup>王<sup>わう</sup>の受<sup>う</sup>へ目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>かりし。甚<sup>た</sup>著<sup>ちやく</sup>後<sup>ご</sup>  
を極<sup>ごく</sup>り。内<sup>うち</sup>公<sup>こう</sup>毛<sup>もう</sup>國<sup>こく</sup>昂<sup>かう</sup>を忘<sup>わす</sup>けらる。年<sup>とし</sup>古<sup>ふる</sup>  
成<sup>なり</sup>切<sup>き</sup>りて。國<sup>くに</sup>王<sup>わう</sup>小<sup>こ</sup>終<sup>しゆう</sup>をか身<sup>み</sup>人<sup>ひと</sup>毛<sup>もう</sup>國<sup>こく</sup>昂<sup>かう</sup>叛<sup>はん</sup>逆<sup>ぎやく</sup>の企<sup>け</sup>  
有<sup>あ</sup>と奏<sup>そう</sup>関<sup>かん</sup>し。水<sup>みづ</sup>ハ國<sup>くに</sup>王<sup>わう</sup>且<sup>かつ</sup>驚<sup>おどろ</sup>き且<sup>かつ</sup>怒<sup>いか</sup>り。一<sup>いっ</sup>急<sup>きやく</sup>乃<sup>すなは</sup>  
今<sup>いま</sup>味<sup>あじ</sup>も及<sup>およ</sup>ばず。すか。阿<sup>あ</sup>公<sup>こう</sup>小<sup>こ</sup>軍<sup>ぐん</sup>兵<sup>へい</sup>を授<sup>ま</sup>け。毛<sup>もう</sup>玉<sup>ぎよ</sup>  
昂<sup>かう</sup>を攻<sup>せ</sup>討<sup>うち</sup>す。毛<sup>もう</sup>公<sup>こう</sup>每<sup>ひ</sup>失<sup>あ</sup>ひの罷<sup>は</sup>を致<sup>いた</sup>す。とらる。とらる。  
阿<sup>あ</sup>公<sup>こう</sup>一<sup>いっ</sup>急<sup>きやく</sup>小<sup>こ</sup>死<sup>し</sup>ぬ。今<sup>いま</sup>ハ兄<sup>あに</sup>才<sup>さい</sup>と云<sup>い</sup>ふ。とらる。とらる。  
遂<sup>つい</sup>小<sup>こ</sup>自<sup>じ</sup>殺<sup>ころ</sup>す。我<sup>われ</sup>なり。おける。毛<sup>もう</sup>公<sup>こう</sup>小<sup>こ</sup>二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>の子<sup>こ</sup>あり。  
兄<sup>あに</sup>を鶴<sup>つる</sup>とり。小<sup>こ</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>歳<sup>さい</sup>才<sup>さい</sup>成<sup>なり</sup>龜<sup>かめ</sup>とり。小<sup>こ</sup>十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>歳<sup>さい</sup>二<sup>に</sup>子<sup>こ</sup>  
とらる。伶<sup>れい</sup>俐<sup>れい</sup>なり。父<sup>ちち</sup>毛<sup>もう</sup>公<sup>こう</sup>年<sup>とし</sup>日<sup>に</sup>皇<sup>こう</sup>叔<sup>しやく</sup>二<sup>に</sup>振<sup>しん</sup>を以<sup>も</sup>て。

是に撃劔を教へ小腕をうくとそ業におい  
 てハ大人おもふと忽ち小仕立ける此柄柄ハ  
 母小後ひいて山南の查國吉とつる親屬の方  
 にまけるが父を公阿公が誘ふ小後く討手  
 を引交無念の形取遂く天小仰ぎ地  
 小伏て涙泣せしが涙拭ひて母に泣くハ  
 父上の寤初ハ今更終りを返す女後ふれば  
 く兄弟面袂取之知くまぬを幸に忍びよる  
 て阿公を討れ父の仇を復せんぞ存ぞるあり  
 能くハ父上の秘蔵ありし二振の宝劔を賜

りんとちひひしく能くも母ハ其も亦忘れ  
 けがけりもまじしつる兄弟かかいつてハ其の  
 ぬく二振の劔取あつて登ししとてみかして  
 分ちあふ兄弟勇人して暇取も父の紀念の  
 宝劔を帯ししけり子をやらして勝連不取り  
 父の仇取を祈らひけるおも阿公ハ目此を悟か  
 ずし毛公を見ひりねば今ハ能くも悔ぞと出  
 の野行ら成海ありと後者成川連出ける父兄  
 才あくも聞出り宝劔を懐かり透るも  
 あらと伺ひる阿公ハ二人の小を成毛公

子と、及も知ぞ。ぬちやしき小冠者も是  
へあく酌ちやくつとせと。孫まごを招まねきよせ。兄弟が客きやく具  
の兼かね川がわにきにかれぬ。数かず飲えの酒さけ代かへけしし。  
醉まよ魚いのあり。着きせし衣いを脱ぬぎ。兄弟が客きやく具  
よく。行ゆも足たりむやろひけん。佩ひりし衣いを脱ぬぎ。  
あふ。鶴つる今いまハ能よくなりと。才さい又また目めくせし。こ奴  
を抜ぬきとるやと。つとあふ阿あ公こうに能よくなり。わぬ  
代かへりし衣いを脱ぬぎ。修しゆるや。修しゆるや。修しゆるや。修しゆるや。  
毛け國こく鼎ていり二人の子をり。父の恨うらみおもひ知しと。柄  
と通とほぬ。美みも。通とほぬと刺さ通とほぬ。ありとらふく

まふふ代かへりし衣いを脱ぬぎ。首くび打うたふ。醉まよ漢かんまきし。  
後のち者ものども。此こゝ袖そで代かへりし衣いを脱ぬぎ。しをとりし。  
狼ろう狽さいも。二人の童子どうしハ透とほ問もんとたり。四方しやうハ面めんを切き  
てり。悉しつく切き殺ころし。なす代かへりし衣いを脱ぬぎ。一ひと馬うまを  
又また撞つ魔まとつ不ふ狂きやうとあり。是こゝハ徭しやう曲きよくの道みち成なり寺てらよ  
似にたり。中ちゆう城じやうの姑こ場ぢやう村むらといふ不ふ和わの農のう家か小せう陶たう姓せい  
なる者ものあり。一ひと子こ代かへりし衣いを脱ぬぎ。松しょう壽じゆと名ななり。齡としもさしに  
十五じふご歳さい。絨じゆう小せう端たん廉れんの美み少年せうねんなり。け國こくの都みやこ  
首くび里り小せう師しありて。常じやうは社しゃ通とほひて業わざ代かへりし衣いを脱ぬぎ。  
一日いちにち浦うら添その山やま徑ぢやう小せうをりけり。日ひ言ごふ乃なひて終しゆう

試先ひ。こゝぬかうさぬに踏迷ふ程よ。はるかに  
 啓<sup>ひら</sup>思<sup>おも</sup>まかりてあいらもかぞ。小竹と折と杖  
 となし。其<sup>こゝ</sup>はよけはよしたどりしが。不のう小  
 火<sup>ひ</sup>終のるえりれば。松壽<sup>しょうじゆ</sup>おほほ又<sup>また</sup>あしめて  
 火<sup>ひ</sup>影を倅り小路<sup>みち</sup>はしり。幸<sup>さい</sup>ひあつく其<sup>こゝ</sup>家<sup>いえ</sup>よ  
 る。一夜のち<sup>ち</sup>あけ求<sup>もと</sup>めりり。此<sup>こゝ</sup>家<sup>いえ</sup>の之<sup>こゝ</sup>ハ<sup>ハ</sup>穠<sup>じゆん</sup>人<sup>にん</sup>  
 あり。一人乃<sup>すなは</sup>娘<sup>むすめ</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>てり。山<sup>やま</sup>家<sup>いえ</sup>よ<sup>よ</sup>け<sup>け</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>も。天<sup>あま</sup>  
 性<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>嬌<sup>きやう</sup>態<sup>たい</sup>あやまきすてふあてやうたり。年<sup>とし</sup>三<sup>さん</sup>  
 うに十六歳<sup>じゆふさい</sup>ば叔父<sup>しゆくふ</sup>ハ<sup>ハ</sup>穠<sup>じゆん</sup>人<sup>にん</sup>出<sup>い</sup>。只<sup>ただ</sup>一人<sup>ひとり</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>  
 ありりり。門<sup>かど</sup>よ<sup>よ</sup>人<sup>ひと</sup>のお<sup>お</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>ひ<sup>ひ</sup>して。知<sup>ち</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>山<sup>やま</sup>路<sup>ぢ</sup>よ

さるくひさる者<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>侍<sup>しやく</sup>ふ<sup>ふ</sup>情<sup>なさけ</sup>よ<sup>よ</sup>山<sup>やま</sup>家<sup>いえ</sup>た<sup>た</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り  
 ことと。りあ<sup>あ</sup>作<sup>しやく</sup>な<sup>な</sup>も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>き<sup>き</sup>られ<sup>れ</sup>り<sup>り</sup>娘<sup>むすめ</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>  
 いか<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>ね<sup>ね</sup>も。折<sup>を</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>一<sup>ひと</sup>  
 定<sup>さだ</sup>め<sup>め</sup>か<sup>か</sup>ね<sup>ね</sup>し<sup>し</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>  
 し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>人<sup>ひと</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ね<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>で<sup>で</sup>よ<sup>よ</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>一<sup>ひと</sup>  
 と<sup>と</sup>同<sup>どう</sup>の<sup>の</sup>戸<sup>かど</sup>を<sup>を</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>。産<sup>う</sup>む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>。情<sup>なさけ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>  
 と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>が<sup>が</sup>。松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>が<sup>が</sup>海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>。ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>  
 め<sup>め</sup>れ<sup>れ</sup>。幸<sup>さい</sup>ふ<sup>ふ</sup>觸<sup>ふ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>挑<sup>た</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>も。松<sup>しょう</sup>壽<sup>じゆ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>  
 き<sup>き</sup>せ<sup>せ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>  
 新<sup>あたら</sup>し<sup>し</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>。始<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>よ<sup>よ</sup>せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>と

抱き付バ。松壽驚き。夜杖振ふて起上る。始今ハ  
 恨のあむ。強而人成生一ハ至じ。目ト眞  
 途一ともふ之と。穢具成。さく飛る。松壽ハ  
 魂こゝろ大おほ飛。爰あち路をたどる。此代一して。足成え  
 不ふ通出をを。何なにまきと追来り。さきまき  
 存ぞんのぬ。松壽やうく。延延く。此山の  
 曲まがにあり。万壽寺といふ寺ハ竝入ふ。うく乃  
 中なか成なり成なり水みづハ。住持普徳といふ僧ハ。行徳  
 いみく。女むすめさある僧なり。りね。さかり  
 松壽成なり滝たき樓ろうへともあひ。大鐘の内ハ伏ふふ。

三人の徒弟成して。其傍也を看守しむ。さか  
 有く彼路。深あらうとさひ来り。三人の僧又問。  
 何なに水みづ知しぎら。神かみままをを家いへし。戯あそ舞まをを帰かへらるまめ  
 んんとも。始はじめハ松壽を求ねど。ね気のぬく泣なみび。  
 形かたちもも行ゆ成なり成なり水みづと。門外ハ竝出ぬ。修しゆ成なり今いまハ心  
 易やすしと。件けんの途を過すんと。其物ものなる山やまなる  
 穿くきりぬバ。女むすめ早くも跑は成なり。髪振礼一形  
 相あ愛いり。意い一いき人ハ徒の内ハこそ有ある  
 と。鐘の内へぞ入いり。住僧驚おどり。諸僧も従したがふ。  
 徒成なり繞まわりて。心こゝろを折おる。新法しんぽうの強たかまや。ううハ

女のねと清橋へより。女の鬼女の相を現しし。  
 又をみく鐘の内を倒たふさよりりれ出。法信を  
 目をそておこる。信たがしもゆつてはくも。動  
 じきぞ折よりゆい。一いつ天候あつふり曇り震動  
 雷電らいでんとらぬしく。女の其信あつ悪魔あくまとてりし壽  
 をねんで走り出。これま一いち馬うまの狂くるえたり  
 け二事ハ皆百年以前。琉球玉中りゅうきよくちゆうと有し  
 古よりたるとあり。け外ハ皆唐土のお家妓  
 ねえは真形とてりたり。又日本の精樂とてり  
 傳へ舞囃子とてりやも真形とてり。其大史書に記さ

好みこの芹せり莉りかどの節ふしび紙し。終はつそとへて清々と  
 たり。

○琉球歌

祖おや練れん先生の琉球聘使記りゅうきゅうへいしきゆ云三線歌琉曲也さんせんかりゅうきょくなり云其

奇あまにいいく。

帝みかどり此こゝ希まれ有ありたり。ほこら志こころざしややあま者ものなり。たふさきうか

たふされ有哉 たて海うみ彩いろを具もはほごであるるるかのたふ

花のなり 津つ由ゆはやとごごとあまを常とことるなり

中ちゆう良りやう安あんふ。此こゝ奇あまの生なま者もの必かならず滅めつ乃すなはち意いを奉ほうとせり。  
 いうさぬめも挽ひ奇あまを記したり。又また謡うた奇あまを載のせられたり。

世乃中の習ひ。いりもつとぶらめ。残る人ふいめ  
まらのぐま。

又娼妓の唱ふ歌あり。

いよふだ。らるる。あやぶのよくはら  
あのかぜにそりよう。

此唱哥ハ。徠存も。うらま  
ほどこふれど。

○神紙

琉球事畧云。慶長年中。本朝の僧。波國より  
あり。其風土の事。紙記せし書を案る。此

玉れけり。先。一男一女化生。一男を。二子リキ

工といひ。其女をア。二キ工といふ。中良案るに。ア。二キ工

久たり。此説上。此記。や。同開の條。と異。同あり。此時。其時。小ありて。

波小漂。一。夕。カ。木。の生し。出志を植く。山乃

神。二。キ。工。といふ。草。成。り。ま。ア。タ。二。といふ。木。成

植く。玉の體。と。一。遂に。三子。成。生。ど。一子。ハ。取。ま。の

主の始なり。二子ハ。祝。始。なり。三子ハ。土。民。の。始。なり

其國に火。かりし。龍宮より。求。ね。く。其。玉。成。就。

人物を生して。守護の神あり。これ。を。キ。二。

モ。二。と。稱。す。中良案る。キ。二。モ。二。を。諸書に。居。真。物。と。記。せ。る。は。な。り。キ。二

訓不發時ハ文相公達と唱ふるなり。和利の創なり。上りつるめく。琉球ハ日本の古語まづのこまなり。

天より下りて。キライカナイノ。キニマモシといひ。海  
より上るを。オホツカクラクノ。キニマモシといふ。毎月に  
出現して。託女トシメト云ふ。中良業ノ。託女ハ巫女のめく。所々  
の拜林イハヒハあり。其託女二十三人あり。皆王家たり。王妃  
も亦一人あり。國中の託女ハ其數を云ふべ  
其林イハヒハ怒り時ハ國人腕折ウデヲリ。所トコロハ是を  
拜慰イハヒ心ココロ也。中良業ノ。是レハ神代の。後の遺風を傳ふるなり。其俗も。嶽々浦々  
の大石大樹。小とくく。皆水ハあがみ繁る。又

七年又一回の荒神アラガミ十二年の荒神ありて。是を諸  
嶋一時に出現を。荒神の出現を。キニテスリと  
いふ。其の出。金比羅也。其年の八九月の間より  
アヲリと云ふ。そのありける。其山をアヲリ嶽と  
いふ。五色をわびやふして。種々のタネの莊嚴あり  
く。之川の嶽ハ三たけり。其大ハ一山をおほ  
ひ盡す。其十月にありて。神かたゞ出り。  
託女王后。各敷ツギら歌う。ひく。神代に。王  
宮の座を以て。神乃其所と。舞三十餘  
を立り。其舞の大なるなり。是を七八丈の輪



十尋あり。小ぶるものハ一文むかり。又山神。  
 時ありと現る。其数多くあらう事なり。  
 又とくなきるなり。其面ハ明あど。袖のきこ  
 しの紙着を。其の衣裳よりまら。後じく。或ハ  
 綿繡のぬくあど。麻衣のぬし。二人のきこを  
 後ふ。二脚五脚といふ其衣裳ハ日本の製はぬ  
 ありて。小袖ハ袴なり。汁へうなる事あり。又  
 臺紙鞭打事なり。臺の啼交大のぬし。又ラ  
 ウチキウといふ海神あり。ウチキウあり。其ハ  
 一文ばうりありて。陰囊こもよ大きき水を

禊を結ひて肩にそく。是等の神は現れし事  
 正しく又さうしてその由をさう。其國乃人の君真  
 物とさう。是等の神は事なり。とくえを  
 中良著る小君真物のキマモこの字例あり。よよさう  
 ぬし。白石先生いふをゆれさうけし。

於事の子細ハ  
 小社の神をなりし社どもおほしといふ。定西  
 法師傳に云。氏神の社ハ。鎮西ハ昂為朝を祀ひ  
 たり。今ハ小社のら矢社ハ有り。若人ありて  
 穿鑿する。にハ。毎才天の社ハ巫女あり。やれがヤ  
 コトサとして。蛇を連と来り人代集也。其蛇より又

それをも罷りしよのに信付いしもたぐむ。よれを  
盗人ともよのたしと記さる。

○宗泐

此國の僧。入唐して法戒傳りて。紙申りて。薩州  
へ來りて法を學ぶ。衣ハ朱黃を著し。袈裟衣  
の外に一衣代被を。其制背公の如し。断俗と名  
づく。帽子ハ清人の笠帽の如し。纏を以て  
衣たり。宗旨ハ臨濟宗と。真言のみならず。中  
山傳信録に之を記す。

○葬式

國中の民ハ皆火葬あり。官宦も亦ハ有力の家も  
てハ先一人生葬を時を踰る昇出—火葬  
あり。又水葬あり。厨肉肉を去り  
白骨紙籠に入石坎の中小藏を置。法事を  
終る時終るそ紙視たり。

○棺擲并墳墓

椀ハ圓く製し其高三尺むり。死者の膝蓋  
を湯みそ洗ひ。足を履先。跣をかきめ。棺  
に納む。墓ハ山小穴紙を牙ちて埋め。  
墨石を以て。貴家ハ石を立。泐又磨りせ。

石壇墓門を建つるも有となく。

○書法

書法ハ日本の大摺流玉置流をもち也。平假名ハ國中此を錢紙とてよく通用を薩州藩中へ付来の書翰いづれも堅状摺状小く一筆皆上乃文衽を用也。書はるは時桌了倚をた手に紙を持懸腕してさるる日本と同じ。

○耕作

田地ハ九月十月の間に耕し種蒔十月十一月の

以緑秧水を出れば日和を又合せ田は移し極は節大雨時不行くれ雷多發し蚯蚓鳴る気候ありとも春の如し。又より翌年より一耘夏五月獲收じ。六月に至れば大肥志をく作り海雨接飛し果実皆多し。小作りは獲納をよくせざれば風抜多し。此國中秋耕し冬種春耘夏收む六月より九月迄ハ農業成事とせむとなり。農具ハ大抵日本製を用也。鋤は鋤鍬をもち。耘は球をもち物ハ浚泥くして用に転むとなり。高田ハ

天水を港へ下因ハ以て身地小一泉成川と  
トし溉ぐ入江小河をといづれも自入なる所  
田地の用を小なり穀一と云

○貢物

琉球國王より 公へまがさるる物件ハ

儀刀一腰 飾馬二疋 卓つこ 音貝おんかい 朱漆しゆしやく 漆器しやくき 大盒子おほいこ 沉香せんじやう

芭蕉布ばしやうふ 大平布おほひらふ 官香くわんかう

久米綿くまいわた 泡盛酒あはせ 官香くわんかう

龍涎香りゆうぜんかう 燒物やきもの 香餅かうびやう 硯石えんせき の大おほい

壽帶香じゆたいかう 名白く細き線香なしろくこほきせんかう 燻かぶ 了りやう 其その 所ところ 一いつ の

上、抵け等の物たるより 公より 琉球人一の  
湯とのい

國王こわう 白銀百枚 綿五百把

使者しや 白銀二百枚 時服十重

惣人数そうじんすう 白銀三百枚

右の通り以下し賜りしものなり

○産物

物産ハ中山傳信録土産の部小六よりこれに  
りらせり 其條下に油樹なるもの有りて其樹  
のめく実もまき橋の大ナ此如し以て油了





讀谷山王子朝桓

秋毎に紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

追風りしとふのふに十餘日紙をととて

紙りしとて

追風りし風の紙をまつとてつる。紙の紙つり

須磨の浦より敦盛の紙をととて

河戸の浦より紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

無きとての紙

浦戸の紙より紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

追風の紙

追風の紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

後山

追風の紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

田子の浦より紙をととて

追風の紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

石二

追風の紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

追風の紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

の月紙とて

追風の紙をよそぬ々のそをまつしとてつる。月新

友枝といふ所にて重なるりし所

板の厚さの厚くは月をえりて終り跡をたはらふ

松尾山

名種りてをくくえぬ松尾山は終りし所のまゝ

海軍の里

少政をに終の庫を埋まりてををりぬしは軍の里

泛の石紙

泛の石紙は君清代ぬしみるまゝ思ひのなれ

去方一匹

油の重なりをうししものまゝ君の家の

附録 二條

○鎮西八郎の事

此書にて小割刷の切を終りしより去やごとを

君より琉球國の長紫金大吏蔡温が撰りし所

の中山世譜を併傳せり終りぬ舜天王の

父の事。此書のことじ免るも引おめく傳信録

あり舜天王日本人皇後裔。大里按司朝公男

子也。とあり。新公の朝をより上よえり。これ

ども此文よりさへく為新と記すれを後なり





一昔昔珠璣

出物此

初出

字義

一昔昔珠璣

六

大官同人等

一 月十日

新報

天



在馬路

崇

移之去去也此也  
志好以渡船破船身  
入少多故好也

流乳之海兒何亦云

比音少勅此

就身法海海每二十日

禮給心好必必發

法礼普中集亦思是

玄相廟子一第安其

花之入之口之

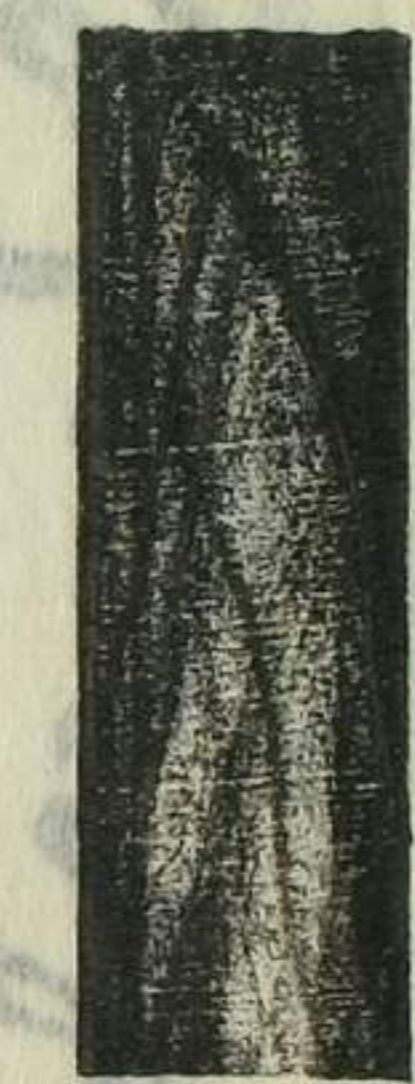
魂

我村子

珠球傳信錄

寛政二年

四月



珠球傳信錄

法政

服蘓門先生校

中山傳信錄

琉球徐葆光著

琉球國の事記  
その事記

全部六冊

清田君錦先生譯

通俗漂海錄

朝鮮崔溥著

朝鮮より唐土の行役記人物  
記述  
海船の事記  
崔溥の事記

寛政二年刻成

同七年卯六月求板

皇都書林

二条通柳馬場東江入  
林伊兵衛

